

【談話 7】IG (1 世) - IH (1 世) 29 分 01 秒

収録地点：アチバイア市内の催事場

収録日：2012 年 9 月 14 日

話者の関係：IG と IH は県人会の知人どうし。県人会として催事場で出店を開いているところに出向いて録音した。催事場なのでバックに音楽が入り、音声が聞き取りにくい個所がある。IG は 3 歳でブラジルに移住したので、1 世ではあるが日本にいたころの記憶はなく、ほとんどブラジル育ちである。

■ 会話を開始する (0:00~)

白：あの一、ま、じゃ、この辺で、【用意した話題表を取り出して】こういったことについて (IG：はい) ふたりでしゃべってもらえますか。(IH：ん、あの) <sup>さんじゅっぶん</sup> 30 分 ぐらい、<sup>にさんじゅっぶん</sup> 20~30 分したらちょっとまた来ますから。○  
○【IH の名前】さんは、これ、読めますよね。

IH：ええ、だ、大丈夫\*\*。

IG：\*\*\*\*\*。

IH：じゃあ、こっからいこうか。はい。

白：ええ。じゃあ、あと、お願いします。  
す。

■ 地元にしたときの話 (0:25~)

IH：はい。えーと、○○さん【IG の名前】、【話題表を見ながら】ここに書いてあのはね、子どもころ、ころの話って書い\*げど、えーと、○○さん【IG の名前】は、安達郡だね、生まれだの、あ、だね。

IG：うん。

IH：安達郡のね (IG：んー) 安達郡のなんていうどご？

IG：○○、○○【IH の出身集落 (大玉村内。細かな地名なので伏せる)】。

IH：○○【IH の出身集落】。

【補足説明：アチバイアの「花祭り」】



アチバイアはサンパウロから北に約 50km。人口約 13 万の町。毎年 9 月に Festa de Flores e Morangos de Atibaia (アチバイア花とイチゴの祭り) が開かれる。この祭りは花や果樹栽培を営む日系人が始めたもので、日系/非日系をとわず、毎年数多くの人でにぎわう。談話はこの祭りの準備の時間帯に収録した。

談話 7

IG: はい。

IH: あー、そう。<sup>わだし</sup>私 は、福島県伊達郡霊山町〇〇【IH の出身集落（旧霊山町内。細かな地名なので伏せる）】ってどごで生まれだんだよね。

IG: ええ。

IH: えーと、〇〇さん【IG の名前】何年ごろ生まれだの。

IG: 32 年。1932 年。

【補足説明：ブラジル語】41 ページ参照。

■ いつ渡航したか／最初の移住地について（0:45～）

IH: <sup>せんきゅうひやぐさんじゅうに</sup>1 9 3 2 年。私は <sup>せんきゅうひやぐよんじゅうさん</sup>1 9 4 3 年、\* \*、生まれました。【話題表を見ながら】えー、ブラジルに来たときの話か。でも、〇〇さん【IG の名前】、いくつで来たって？

IG: ん、みつつで来てるがらね。ブラジル語話すっていう…

IH: あ、みつつだ。〇〇さん【IG の名前】はみつつで来たんだ。

IG: ええ。まあ、配…、ブラジルに（IH: うん）配耕【耕地を配分されること】んなったのが、まあ、あー、Mogiana 《地域名：モジアナ（サンパウロ州北部）》。

IH: あー、Mogiana 《モジアナ》って（IG: ええ）いうどごまで行ったわけ？ ほう。

IG: ん、\*、\*、Itu…、Ituverava 《地名：イツベラバ》。

IH: え？

IG: Ituverava 《イツベラバ》。あの…

IH: Ituverava 《イツベラバ》。

IG: はい。

IH: うん。

IG: Ituverava 《イツベラバ》の fazenda 《農場》に入りました。

IH: fazenda 《農場》に入ったの？

IG: はい。

IH: 農場だね。農場に入ったわけね。

IG: コ、コーヒ、コーヒーの。はい。

IH: コーキ、コーヒー、コーヒーだったの？

IG: コ、コーヒー\*。

IH: あー、そうなんだ。

IG: はい。

IH: へえ。んー、そこで、けっこうたくさん日本人、おったわけ？

IG: えー、えー、たしか<sup>にさん</sup>2~3…人おったようなことは papai 《お父さん》が<sup>はなし</sup>話  
しよったよね。

IH: Ai 《あー、そう》。

IG: はい。

IH: あー、そう。あ、コーヒー園だったんだ。

IG: そうですね。

IH: ふーん。あー、そうですか。俺もそうなの。俺は、俺は 15【歳】で来たけども、やっぱり俺もコーヒー園に入ったのよ。

IG: \*、そう。

IH: コーヒー、うん。(IG: あー) あの、Paraná 《地名: パラナ州》のほうに。  
(IG: あー) Paraná 《パラナ州》\*\*行って。(IG: ええ) あなたは São Pa  
…、あんたは São、São Paulo 《地名: サンパウロ》州だよ。

IG: \*\*、ええ、São Paulo 《サンパウロ州》。

IH: ねえ、〇〇さん【IG の名前】、São Paulo 《サンパウロ》州ね。

IG: ええ、São Paulo 《サンパウロ州》。

IH: 俺は Paraná 州ってとごで、fazenda 《農場》にやっぱり、あのころ南米銀  
行の土地<sup>とじ</sup>だったんだけど、そごに配属されたよね。そこでやっぱり café 《コ  
ーヒー》で、俺、café 《コーヒー》で3年ぐらい俺も<sup>はだら</sup>働いたかな。うん。  
あー、そうなんだ。

IG: eu 《私》らも3…、eu 《私》らも3年…

IH: Ai 《あー、そう》。

IG: はい。Mogiana 《地域名: モジアナ (サンパウロ州北部)》のあれに行って、  
それから、あの、Luté, Vila Lutécia 《地名: ルテシアの町》、Paraguaçu  
Paulista 《地名: パラグアス・パウリスタ》の (IH: うんうん) まだ fazenda  
《農場》。それ、やっぱ、あの、patrão 《雇い主》が日本人だった\*\*でね。

IH: あ、日本人だったんだ、patrão 《雇い主》は。

IG: ええ。日本人だった\*\*\*。〇〇【人名】さん、〇〇【人名】さん。

IH: あー、そう。

## 談話 7

IG: はい。で、結局その人は、ま一、Atibaia 《地名：アチバイア》今住んでますよね。

IH: あ一、そうなの？

IG: ○○【人名】さん。○○【人名】さん。

IH: あ一、あ一あ一。【その人物のことが思い当たった様子で】あ一、そうなの。

IG: ええ、○○【人名】さん。

IH: へえ、あ、そういうごどなの。(IG: ええ。\*\*) じゃあ、やっぱり日本人だから、い、いろんなごど、みんなに対してはよがったでしょう。\*\*\*

IG: ええ、そうそう。

IH: ねえ、そうだよ。

IG: それで、あの人( IH: うん) Atibaia 《アチバイア》に先、来たんですよ。( IH: あ一、そう) それは、よ、43年にたしか○○【人名】さん( IH: うんうん) \*\*\*\*よ。( IH: へえ) それで、そのあとに、あ一、30…、45年に( IH: うん) 1945年に( IH: うん) え一、僕らも、そのあと続いてね( IH: うん) Atibaia 《アチバイア》ん来て、まあ、Atibaia 《アチバイア》<sup>ゆ</sup>って言ったらいいだろうって\*\*…( IH: うん) Atibaia 《アチバイア》に<sup>とじこ</sup>土地買って入ったんですよ。\*、現在、今、住んでるごど。

IH: あ一、そう。

IG: はい。

### ■ 移住を決めてから船に乗るまで (3:25~)

IH: ○○さん【IG の名前】、でも、【話題表を見て】ここに書いてあのはね、「なぜブラジルに来たか」って書いてあんだけど、ブラジル…

IG: なぜ来たがっていうごどは、全然そのごどは、わから…

IH: {笑} いや、あのね( IG: ええ。まあ…) 俺はね、俺、俺は、あの一、俺、<sup>しち</sup>7、俺は<sup>しち</sup>7人兄弟なのよ。<sup>しち</sup>7人兄弟で( IG: うんうん) 男6人の女<sup>しとり</sup>1人だったの。ほで《それで》、ちょうどうちのおやじは、あの、うちの、お、おやじなんか<sup>わが</sup>若いころ来たかったらしいよ、結婚する前ね。( IG: ん一、はい)ところが、それが夢がかなわ\*\*\*\*【「かなわなくなったんだ」か】。どう\*\*\*\*<sup>こ</sup>ったら、親の反対あつて来れなかったわけだ。それで、俺

だちが成長して結婚、mamāe《お母さん》…、papai《お父さん》が、ね、おやじが結婚して、成長して、俺たち、5、5人も6人も7人も子どもおるもんで、で、うちの兄貴が農学校出たのよ、日本で。農の、農の、の、専門学校ね。(IG: うんうん) それで、兄貴がなんかブラジルに行きたいっていうんで「あー、だったら」、おや…、おー、うちのおやじもなんか、それ、昔、若いとき来たかったっていう、あれが、夢があったもんで、「あー、じゃあ、じゃあ、もう子ども、男の子も多い\*\*、ねえ、男の兄弟多いがら、じゃあ、ブラジル行くが」って、それ決めて、おやじと、した《そしたら》、兄、兄が決めちゃって、勝手に決めちゃってさ、俺たちは後で、「\*\*、それ、ブラジル行くぞ」っていわれたわけだよ。(IG: あーあー、あーあーあー、はい) なにも相談ながったんだ、俺たちにはね。まあ、でも、俺も小さかったがら、で、自分でまだ、ねえ、生活できるわけじゃねえしね。だから、そういうあれで、結局おやじにすりゃ、やっぱりブラジルっていう\*\*\*はこういってごだって聞いてとったし、じゃあ、男兄弟、子ども多いがら、じゃあ、ブラジル行って一旗あげようかと思って、おやじはそういうあれで来たんだらうげどね。だから…、でも、10年ぐ…、こういう、うちのおやじは言ったよ。「10年ぐらい働いで(IG: あー、\*\*) 日本に帰るんだ」って、金ためて、そういうごど聞いたよ。(IG: うん、あー) とこどっこい【「ところがどっこい」の意味か】、そうはいかんよな。来て、来てみりゃ、そんな簡単じゃないのよ。

IG: はいはい、\*\*\*\*\*、わか\*\*\*\*\*かね\*\*\*\*\*しね。

\*\*【IHの発話と重なって聞き取れない】

IH: \*\*\*のね。みんな、みんなそうなのよ。みんなそういう、ほとんど《ほとんど》日本から来た人、そういう夢あったんだらうげどね。(IG: はい) でも、そうどっこい、いがながった、やっぱり知らん土地でさ、んな《そんな》10年ぐらい働いだってそう簡単に\*\*ね、(IG: \*\*\*\*\*) そんなに、まあ、\*\*\*、儲かった人もおるかもしんに《しれない》げど、(IG: うん) でも、だいたいみんなね、そうでなかったんだよね。(IG: ええ) みんな厳しがったんだよね。し、知らん土地に来てやんだからね。だから、けっこうあれだったんだけど、だから、うちはやっぱりおやじで、おやじはやっぱり将来子どものためと思ってブラジルに来たんだ

## 談話 7

ろうね、ど思うよ、はっきり言<sup>ゆ</sup>ったらね。

IG: うちの papai 《お父さん》、うちの papai 《お父さん》はね、だいたいまあ、日本…、ブラジルへ来て、まあ、日本に帰るとは全然話はしなかった \* \* \*、(IH: Ai 《あー、そう》) ええ、ブラジルに来たのは、だいたい、そ…、んー、日本で農学校に行つとつたらしいんだよね。 \* \*

IH: あー、おやじが。

IG: ええ。(IH: あ、やっぱり。) papai 《お父さん》、(IH: あー、それやったんだ) 全然 eu 《私》らには話はしなかったげんともね 《けれどもね》、(IH: あー) そんで、まあ、その農業っていうのを、ん、ま、将来としてもね、で、「日本は狭い」と、ブラジルはもうちょっと広<sup>ひろ</sup>いっていうご<sup>ご</sup>で、 \* \* \* ブラジルに行って農業やりたいって<sup>あだま</sup>いうような頭<sup>あたま</sup>があったのかもしれないというふうに eu 《私》は感じるんだよね。ほれで…

IH: あー、 \*、 \*、そういう人<sup>ひと</sup>、けっこう多いんだよね。

### ■ ブラジルでの生き立ち／日本語学習の話 (6:30~)

IG: ええ。だから、もう農業というものに力入れて、まあ、eu 《私》らも、もう、eu 《私》と弟にもね、農学のほうに出してくれたよね。(IH: はいはい) それで、 \* \*、 \* \*、行きましたよね。(IH: はいはい) ほんで、日本に帰るとは、全然話はしなかったからね、僕らにも、日本語っていうものは全然ね、話もしなかったし、日本語ちょっと勉強するという、いう、気も全然<sup>しと</sup>一つもなかったね、papai 《お父さん》はね。(IG: んー) まあ、ブラジルに来てるんなら、ブラジル語さえ、さえ、知ってればね、通るんだがら、ブラジルに…、ん、 \* \* \* \* はしなかったからね。 \* \* \* \*

### ■ 最初の移住地について (7:10~)

IH: んー、じゃあ、〇〇さん【IG の名前】、最初は結局、São Paulo 《地名：サンパウロ》州だよね。

IG: ええ、もう São Paulo 《サンパウロ》 \*、 \* \* \* \*、 \* \* \*、 \* \*

IH: 農場に入ったわけだ。私もそうだよ。私は Paraná 《地名：パラナ州》だけどね、(IG: はい) 〇〇【IG の名前か】は São Paulo 《サンパウロ》州だね。それで、仕事は最初コーヒー園<sup>はだら</sup>だったわけね。コーヒー園で働いたわけ

ね。

IG: うん、そうそう。まあ…

IH: 私もコーヒー園だよ、<sup>はだら</sup>働いたのは。(IG: うん) うん。それで、<sup>さんよ</sup>3~4年  
おったよね。\*、それで…、\*\*、どうでした? 暮らしは。最初。

IG: ん、暮らしっていうね、うちの、うちの家内【「嫁」ではなく「家族」の意  
味】、papai 《父》、mamai 《母》、あとひとり、もらい子<sup>こ</sup>して、(IH: うん) 3  
人で、(IH: あー) あ、まあ働いてたよね。(IH: あー、あ) あどはみんな  
こまかった《小さかった(西日本方言)》もんね。みんな小さい。もう、あ  
ー、いちばん上の姉が…、<sup>むっ</sup>6つ、\*\*\*、んー、\*\*、cinco 《5》、seis  
《6》、<sup>ななず</sup>7つ。

IH: あ、ね、<sup>ねえ</sup>姉さんが?

IG: <sup>この</sup>9つ、<sup>この</sup>9つだった、\*\*

IH: あ、<sup>ねえ</sup>姉さんが?

IG: うん。いちばん上の。

IH: いちばん上の姉さんが (IG: ええ、姉さんがね) <sup>この</sup>9つだったの?

IG: ええ。\*\*\*

IH: ○○さん【IGの名前】、さ、3歳、3歳ぐらい\*\*、来たとき。

IG: え?

IH: ○○【IGの名前】\*\*\*\*、3歳?

IG: 3歳。

IH: 3歳で来たんだよね、○○【IGの名前】さん

IG: はい。

IH: あー、そうなんだ。んー。

【数秒間、通りがかりの人の声が入るのでその間の音声を消去した (IG と IH の  
会話は進んでいない)】

IH: んー、まー。

【ふたたび通りがかりの人の声が入るのでその間の音声を消去した (IG と IH の  
会話は進んでいない)】

IH: そうか、じゃあ、まあ、やっぱりお互いに、ブラジルに来たとき、やっぱ  
りこっちの、\*、なんていうの、いろんな風習も違うし、ね、文化も違う  
から、(IG: はい) まあ、いろんなことに慣れるまでは大変だったよね。う

【補足説明：構成家族】

IGの発話にあらわれる「もらい子」は  
移住のために他人を家族に加えたものと  
思われる。13ページの「構成家族」参照。

## 談話 7

ん。

IG: そうそう。みんなそれは苦勞してますよね。

IH: あ、あーあー。そうそう。でも、それは、もう2~3年過ぎたらね、だいた  
いこっちの暮らしにも慣れたしね。(IG: うん) ま、食べ物もだいぶ違うと、  
そういうものも慣れたしね。で、ことばだけだよ、ことばってのは…

### ■ ブラジルでの生い立ち／ポルトガル語学習の話／日本語学習の話 (9:05~)

IG: ことばっていうのはね。

IH: あれ、ことばっていうのは、でも、〇〇さん【IG の名前】はね、(IG: はい)  
ブラジル、ブラジルの学校行ったんでしょ。

IG: そう、僕は…、ブ、ブラジルの学校で、はい。

IH: ねえ、3歳で来たんだからね。

IG: \* \* \* \* ブラジル \* \* \* \*、はい。

IH: そうだよ、ポルトガル学校行ったんだよ。

IG: そうそう。

IH: だから、〇〇さん【IG の名前】は学校行ってっから、ブラジルのことばに  
対して何も違和感もなかったし、(IG: \* \* \* \* \*よ) あれは \* \* \* \* \*  
ね。そうでしょう。

IG: はい。

IH: 私と違う。私は、もう、結局、ちょっと大きくなってから来た…、こっち  
の学校は全然行ってないもんね。私、行ってないのよ。(IG: うん、あー、  
\* \*) それで、もう来た1週間後には、もう、もう、すぐ、あの、<sup>はだけ</sup>畑に  
出で、毎日、\* \*、もう草取りだよ、もう、\* \* (IG: はい) <sup>きょう</sup>今日まで、  
俺 <sup>ろくじゅうきゅう</sup>6 <sup>9</sup> 人なんだけど《なるんだけど》、もう15 <sup>いちにじ</sup>がらこっち、ずっ  
ともう働きづめだよ。それで、学校は、ブラジル学校1 <sup>いちにじ</sup>日も行ってな  
い。ただ、(IG: うん) 自分でちょっと独学で、自分でこう。(IG: うん、  
\* \*) まあ、ね、あの、alfa, alfabeto 《アルファベット》ぐらいは日本  
でちょっと習ったもんで、だ【だから】、こっちでね、\* \*、ポルトガル語  
ど、おー、inglês 《英語》、inglês 《英語》の、ちょっと違うだけであって、  
俺は <sup>エービーシー</sup>A B C 【ポルトガル語読み(アーベーシー)ではない】は習ったも  
んで、日本で少しね。だから、A B C <sup>エービーシー</sup>はわがとったから、だ【だから】、

自分で独学してちょっと覚えだよ、(IG: うん) ことば。でも、お互いにやっぱり日本人、日本人だから、どうしても日本語は、まあ日本語は別に、ふ、不自由しないでしょう？

IG: ええ。ふ、不自由しないですよ。はい、今の…

IH: ねえ、そうだよ。\*、ね、<sup>わだし</sup>私 も、日本語は別に、たいしてあまり不自由しないし。ね。いちおう、ま、日本語は習ったもんで。だ【だから】、ただ、私の場合は、はっきり<sup>ゆ</sup>言って、Português 《ポルトガル語》はそんな<sup>じょうず</sup>上手じゃない。\*、学校行ってないから、まあ、普通の日常会話どが、そういうのは別に問題ないけど、ねえ、〇〇さん【IG の名前】は学校行って\*から【「行ってから」「行ってるから」「行ってっから」のいずれなのか聴取不能】、\*\*\*\*\*、ほんと、あれだよ。

IG: あ、ブラジル…、え、eu 《私》ら、ブラジルのほうが、(IH: でしょ？ ねえ) まあ、\*\*\*\*\* 【「書きいいね」か】。読み書き、読み書きでざるげんとも《できるけども》。

IH: \*\*\*\*\*、ねえ、ねえ、行ってっから。\*\*

IG: 日本学校は行ってないがらね、(IH: あー、あーあー) だから、読み書きはできないですよ、全然。

IH: でも、普段の会話っていうのは、別に何も問題ないでしょう？

IG: ええ、\*\*、しゃべるのには、まあ、不便ないからね。

IH: でしょ？ 私はどっちかったら、やっぱ日本語のほういいもんね。\*\*\*\*\* (IG: うん。あー、そう\*\*) ほんで、日本語、まあ、難しいポルトガル語わからんもん、俺も。学校行ってないから。(IG: あー) そういうごどはありますよね。\*\*、んー…

{間}

### ■ 日系団体の話 (11:25~)

IH: もう、〇〇、〇〇さん【IG の名前】って、もう、俺 Atibaia 《地名: アチバイア》来てからだから、もう 30 年ちょっとだよ。俺、(IG: \*) さんじゅう…、俺、37 年なるもの、Atibaia 《アチバイア》ん来て。(IG: あー) それから、福島県、俺も福島県だから、えーと、〇〇さん【IG の名前】も、福、福島県人だしね。それで、県人会もあったし、いろんな関係で、ねえ、

談話 7

ずっと、ねえ、知り合ってきたよね、今までね、(IG: \*) お互いにね。あー…

IG: 俺はもう、45 年に Ati、A、Atibaia 《アチバイア》に入ったんだ\*、せんきゅうひやく…\*。

IH: あー、45 年？

IG: ええ。それでもう何年なるかな、もう 60…、(IH: はー) ま、70 年。

IH: うん。あ、45 年なんだ。\*\*\*

IG: \*\*, はい。もう Atibaia 《アチバイア》ではもう、ずっともう文協【日系団体「文化体育協会」】関係、(IH: うん) \*\*, あー、\*\*, Atibaia 《アチバイア》に青年会あったもんね、Atibaia 《アチバイア》ね。

IH: あー、\*\*\* でしょ？

IG: はい。それで、青年会、野球やったりね。そういうのあれして。

IH: それは福島県人会で？

IG: não、não 《いえいえ》、いやもう…

IH: あ、日本人。

IG: にほ、日本人会。

IH: あ、日本人会でね。

IG: はい、\*、日本人会。

IH: あー、そういうごど、あったんだ。

IG: いろいろ、(IH: うんうん)

ま、文協のほうのね、あ、日本人会の、(IH: うん) あー、〇〇【役職名】もやったときもあるしね。(IH: うん) はい、\*\*\*\*\*。まあ、だいたい Atibaia 《アチバイア》の、あー、日本人会というのは、青年会が集まりできて、(IH: うん) その次に、あとで日本人会っていうのはできたんだからね。(IH: あー、そう) まー、\*\*\*、まー、青年会で (IH: うん) 決めて日本人つつうのを作ったんだがらね。(IH: \*\*) あの当時。(IH: あー、そう) なんだ。あー) えー、まあ今は文協になって、(IH: うん) だん

【補足説明：アチバイア福島県人会】



この談話は、アチバイア福島県人会が祭り (155 ページ参照) の会場で開いた出店 (食事処) で、準備中の時間に収録した。忙しいさなかにありがたいことである。写真は、開店後ににぎわう店内。

だん、だんだん大きくなってきたけんどもね。(IH: はいはい) はい。\*、\*\*、Atibaia《アチバイア》日本人会は、eu《私》ら、\*\*\*\*\*【「こしらえたもんです」か】。

IH: あ… {間} 福島県人会ってというのは、できてから何年なの？

IG: あれは…

IH: Atibaia《アチバイア》では。

IG: 盆踊り始まってからなんだからね、盆…、ま、ちょっと前だから、\*何年だったかな…、せんきゅうひゃぐ…、日本が…、あ…

IH: 30年ぐらい？ \*\*、なんか30年って<sup>ゆ</sup>言ったね、\*\*\*\*\*、ね。

IG: あれが30年だから。 <sup>きゅうじゅうきゅう</sup>9 <sup>きゅう</sup>9 年が <sup>さんじゅう</sup>30 周年だ\*\*

IH: んー、あー、そう。{間} 何年が？ 何年が30周年？

IG: <sup>きゅうじゅうきゅう</sup>9 <sup>きゅう</sup>9 年。

IH: あ、<sup>きゅうじゅうきゅう</sup>9 <sup>きゅう</sup>9 年。(IG:

\*\*\*\*)いま、んじゃ、んー、だからもう、さんじゅう、いや、あ、やっぱりもう、(IG: もう <sup>よんじゅう</sup>40 …) 33…、うん。

IG: もう <sup>よんじゅう</sup>40 …

IH: うん、よ、<sup>よんじゅうさん</sup>43。

IG: <sup>よんじゅう</sup>40 す《40です》。

IH: <sup>よんじゅう</sup>40 ぐらいだね。(IG: <sup>よんじゅう</sup>40 …) <sup>よんじゅう</sup>40 年ぐらいだ。(IG: はい、<sup>よんじゅう</sup>40 年)

福島県人会できて、Atibaia《アチバイア》で。

IG: はい。

【補足説明：福島県人会の盆踊り】



アチバイア福島県人会は盆踊りで知られる。写真は祭りの催しとして組まれたやぐらと踊る人々。現在は、日本語の話せない若い世代や非日系のブラジル人が主体とのこと(次世代につながっている)。見よう見まねで踊れるので、通りすがりのブラジル人も入り乱れて踊る。

### ■ 友人の話／どんなことばを使うか (13:55～)

IH: あ、そうなんだ。あー。【調査者の用意した話題表を見て】あーと、友人関係が？ 友人関係って、もうでも、〇〇さん【IGの名前】はね、いちおう <sup>がっ</sup>ブラジル学、学校に行っつから、ブラジル人とのつきあいも多いでしょ

## 談話 7

う、けっこう。

IG: 多いね、\*\*。

IH: でも、どっち、だ、だいたい、ど、どうなの、どっち\*\*

IG: まあ、どっちつつうの、あー、もう、\*\*\*だよ、もうね。

IH: どっちもどっち。

IG: はい。

IH: ○○さん【IGの名前】は、

IG: そうそう。

IH: どっちもどっちだ、○○さん【IGの名前】は。

IG: はい。

IH: あー、そうか。俺の場合はね、俺やっぱり、俺はどっちかったら、俺はやっぱり、まあ、ブラジル人のほうが知り合い多いよね、あんた、50年もいりゃさあ。(IG: あーあー) でも、本当の知り合いっていうのは、やっぱり、に、俺はやっぱり日系人のほうが多いな。どっちかったら。(IG: あー、そうでしょう) うん、多い。俺は、に、日系が多い。(IG: うん) んー、だから俺も、結局、レストランやとったもんでね、いろんな知り合いの人は多いけども、そういうお客さんどがなんか、おったら。だから、まあ、本当の友人関係っていうのは、やっぱり、に、俺は日系のほうが多いね。(IG: うん) う、私はね。(IG: Ai 《あー》) \*\*\*。でも、でも、日系の人とね、【調査者の用意した話題表を見て】ここに書いて\*、「日系の…人とは何語で話すか」って書いてあつけども、でも、俺たちはやっぱり <sup>じ</sup>mistura 《混ぜる》するよね、もう。(IG: ええ、\*\*) やっぱり日系の人でもさ、Português 《ポルトガル語》、なんか日本語わからん人もおるもんな、あんまり。

IG: そうそう、おる。

IH: そうですね？

IG: はい。

IH: そしてやっぱり俺たちは、やっぱり <sup>だじ</sup>Português 《ポルトガル語》で話せるか。

話さんにんだもんね 《話せないんだもんね》。(IG: うん、あ、ま) だから、これは、その日系人でも、日本語を知らん人はだめだから、だから、これはどっちつてもいえないんだよね。だから、Português 《ポルトガル語》のほうは、俺は…

IG: あー、混ざりこざり【「混ぜこぜ」の意か】だね。\*\*\*

IH: あー、ね、ま、混ざりだよ、もう。

IG: まあ、まあ、みんなね。はい。\*\*\*

IH: だから、本当の日本人、日本、やっぱり日本語わかる人は、日系人でもやっぱり日本語で話すけど。 (IG: うん) わからん人はどうしようもないもんね、 (IG: はい) 片言じゃ。やっぱり Português 《ポルトガル語》 で話さ  
\* \* しょうない《しょうがない》もんね。 (IG: そうそう) 俺はあんま上手  
でないけど Português 《ポルトガル語》 使って話すけども、ま、\* \*、〇〇  
さん【IG の名前】は、もう、ね。

IG: いやもう、\* \* \* \* 【「どっちもどっち」か】。半分半分、もう半分より…

IH: \* \*、もう、Português 《ポルトガル語》、もう、それは学校行ってっからさ、あれだ\*、俺ど違うけども。だ【だから】、俺の場合は、どっちかったら、もうあれだね、 (IG: \* \*) まあブラジル人なんか、日系人でも知らん人どは、もう、こう、なんていうか、片言で話す。まあ、通じるからね、別にあれだけど。

{間}

■ 仕事の話／どんなことばを使うか (16:05~)

IH: 【調査者の用意した話題表を見て】それど、仕事<sup>しごと</sup>、これ、仕事の間関係についてね、〇〇さん【IG の名前】、ここに書いてあるけど、 (IG: ええ) 「しごと、仕事でつきあう人<sup>ひと</sup>は、日系人とブラジル人でどっちが多いか」って書いてあんだけど。あなたの場合、どうなの？

IG: やはりブラジル人が多いね。

IH: やっぱりね。

IG: はい。

IH: あ、そうなんだ。やっぱり、みんなどうしてもそうだよ。 (IG: あー) 仕事やってる人<sup>ひと</sup>は、やっぱりブラジル人関係、仕事のほうがやっぱりブラジル人が多くなるよね。 (IG: 多い、お、\* \* \*、ええ) これはどうしようもないよね。 (IG: はい) ここは日本じゃないから。 (IG: うん、そう) ブラジルだから。どっちだったって、日本人ばかり相手じゃ仕事にもならんね。

IG: \* \*、仕事にならないわ。\* \*

談話 7

IH: そうですね？

IG: はい。

IH: 俺もやっぱ、レストランやったけど、そうだもんね。やっぱり、レストランやったって、<sup>ななじゅっ</sup>70%はやっぱり外人【ブラジル人】だもんね、<sup>ななじゅう</sup>70%、<sup>はじじゅっ</sup>80%はね。(IG: そう\*\*、はい) あど15どが<sup>にじゅっ</sup>20%が日本人なんだもんね。だ【だから】、これは、ここで本当、商売とが、なんかやる場合でも、(IG: \*\*\*) やっぱりもうブラジル人がやっぱ、いちおうブラジル人\*\*しなかったら、商売やってけないもんね。

IG: \*\*、やってけない。

IH: そうですね。

IG: で、まあ (IH: うん) ブラジル人のほうが (IH: うん) 使いやすいね。

IH: あ、あー。あー、それはあるね。

IG: うん。あー。

IH: あ、今度、働いてもらうのはね。

IG: うんうん、そうそう。

IH: それはあるよね。

IG: はい、はい。

IH: うん、確かにそれはあるよ。

IG: んー、なに、もう、こう、(IH: {笑} うん、うん) つきあい、つきあいも、ブラジルのほうが、(IH: うんうん、うん) もう\*\*、あっさりしてるような (IH: うん) 気がするね。

IH: うん。

IG: はい。

IH: あ、そっか、そういうごどはあれだな。(IG: うん) うん、それは言えるね。

(IG: はい) それは言える。まあ、たまに変なのおっけども、(IG: {笑}) でも、どっちかったらば、それはあと、また、あつかいにくい…、(IG: あー、あー、はい) あつかいやすいよね。<sup>はな</sup>話しても、なにか (IG: \*\*\*) あったってさ、なにかこう、問題あったって、あー、わりかし、こう、すぐなんか忘れるってわけじゃないんだけど、あどでこう和解すんの早いよね。(IG: そうそう) 日本人はちょっとなかなかね。(IG: あー、なかなか) なにかあったらさ、(IG: あ、\*\*\*ね) 大変だもんね、日本人は。もう、

あとのあとまで、こう、なんか\*\*。ところが外人【ブラジル人】っていうのは、そういうご、やっぱり、こう、なんかつきあいやすいよ、やすいよね。(IG: うん) まあ、ふん…、\*、ふんどころつく【「納得がいく」の意味か】。まあ本当、心<sup>しん</sup>からつきあうのはどうか、知らんけども、(IG: ええ、\*\*、あー) 普通のあれだったらば、だいたい外人のほう、いや、もう、ね、つきあいやすいよね。(IG: つ、つきあい) これは言えるね。(IG: はい) うん。んー、んー。まあ、仕事もやっぱり、ブラジルにおれば、やっぱ、やっぱりポル、ポルトガル語と…、使わんとね。ブラジル語【ブラジルのポルトガル語】使わんとどうしようもないよね。(IG: うん。\*\*) それはしょうがないよ。(IG: \*\*) \*\*\* 【IGの名前にも聞こえるので音声は消去した】まあ最近、ブラジル人もかなり日本語を知ってる人おるけど、(IG: はい) でもまだまだね、やっぱりどっちかったらば、ブラジル人はブラジルのことばで、<sup>だじ</sup> <sup>わだし</sup> ながら、俺たち、<sup>だじ</sup> 私、まあ、〇〇さん【IGの名前】はもう Português 《ポルトガル語》の学校行ってっから大丈夫だけど、俺の場合は学校行ってないが、まあ難しいごどは話せ\*。でも、ねえ、まあまあ、(IG: \*\*\*\*、あー) 普通のこど、普通のこどはね。なんとか、こう、ね、話すことできるしね。ほら、\*\*、50年もおんだからね。んだから、まあ、まあ、こっちは、その、その<sup>しと</sup>人、ね、ブラジル人、日系人についての使い分けだね、しょうないね《しょうがないね》。だからお互いに、俺<sup>だじ</sup>たちは日本語も Português 《ポルトガル語》も、だいたいわかるからね、(IG: はい) 使い分けで仕事の関係は使えるよね。\*\*、あ、〇〇さん【IGの名前】は日本に行ったごどあんの？

■ 日本にいる親戚の話 (19:15~)

IG: não 《いや》、全然ない。

IH: あ、行ったことないの。〇〇さん【IGの名前】さん、行ったことない、日本に。

IG: \*\*\*\*。

IH: あ、そうなんだ。あー、〇〇さん【IGの名前】は一回も日本に行ったことないんだ。あー、そう。あー、私<sup>わだし</sup>は日本にちょっと10年近くいできたから、あと、何回か日本に、(IG: んー) こう、遊びも行ってるとし、何回…、

## 談話 7

い、行って\*\*、ね。あれだけでも、んー、あ、そうか、〇〇さん【IGの名前】は日本に行ったごとないんだ。

IG: うん、そう。\*\*\*ない。

IH: じゃあ、一回ぜひ行ってみ、行ってみんならんな《行ってみないとならないな》【福島方言の「行ってみんなんねえな」に由来するか西日本方言か不明】、じゃあ。

IG: 行ってみ…、\*\*\*\*。

IH: ん？ 私\*\*、\*\*\*\*\*。

IG: あー、えーと、うちの姉がいて。<sup>はなし</sup>話したよね

IH: あれ、誰、誰か、あ、誰かおるわけ？

IG: あー、甥っこ。

IH: 甥っこがおんの？

IG: ええ、ええ。

IH: あ、本当。あー、そう。へえ。まあ、そうだよな。

IG: どんなんしてるか、知らんけどもね。

IH: んーんーんーんー。俺はこの前行ったとき、愛知県に行ってきたんだよね。

愛知県に10年近く行ってきたからね。\*(IG: うん) あー、そうですか。

### ■ どんなことばを使うか／日本語学習の話／ポルトガル語学習の話 (20:15 ~)

IH: {間}【調査者の用意した話題表を見て】えーと、ことばについてね、ことばはどう、日本語とポルトガルとどちらが、はな、話しやすいか。〇〇さん【IGの名前】は。

IG: あ、やっぱりブラジル語のほうが使いやすいよね。

IH: あ、〇〇さん【IGの名前】は、やっぱりポル、(IG: \*\*\*) ブラジル、ポルトガル語のほうがいい、\*。

IG: \*\*、あー、Português《ポルトガル語》のほうが。

IH: あー、そう。で、日本語はどこかで習ったの？

IG: não《いや》、全然習ってない。

IH: 習ってないの？

IG: não《いいえ》。

- IH: あ、親、親どがなんかから覚えだわけだ。
- IG: うーん、そうね、やっぱり日本人だからね。
- IH: \*\*、日本人の、あれから。
- IG: \*\*\*\*
- IH: あー、そうなんだ。
- IG: \*\*\*\*、\*\*\*\*
- IH: あー、そうか、日本語は別に習ってないわけね。
- IG: はい。そういうごどで。
- IH: じゃあ、あー、こう、耳で聞いて、papai 《父親》とか mamãe 《母親》からこう、(IG: ええ) ねえ。習って、あど、普通の日本人と話し合って覚えだわけね。
- IG: んー、はい。まあ、その程度でね。
- IH: あ、ポルトガル語は、結局、学校に行ってっからね。
- IG: ええ、そう。\*\*\*
- IH: あー、そうだ。〇〇【IG の名前】さんは学校に行ってるから、いちおう、これは、だいじょぶだね。あー、私の場合は、俺もポルトガル語学校行ってないけど、でも、俺もやっぱり、自分でちょっと少し独学で勉強して、あとは… (IG: つき、つきあいで、あー、はい) つきあいとかなんか、つきあいでね、自然と。(IG: \*\*\*\*) 悪いごどから覚えでさ {笑} (IG: {笑}) \*\*\*\*、まあまあ普通のごどはね、(IG: あー) 日常会話はあんまり支障はないよね、我々。んー、(IG: んー) それは、あー、だから、ポルトガル、日本語、ポルトガル語…だね、だいたいはね。

{間}

■ 仕事の話 (21:35~)

- IH: 最近の仕事は、ん、〇〇さん【IG の名前】は、\*\*、自分でやっぱりなにかやってんの？
- IG: えー、自分、まあ、いや、まあ、どんどん仕事せにやいかんからね、(IH: あー、あ) まだやってますよ。自分、はい。
- IH: やってるわけね。まだ現役でやってるわけね。
- IG: まあ、果樹園、果樹園。

## 談話 7

IH: うん、そうだね、はいはいはい。で、休みの日ってあんの？

IG: あー、ない。

IH: ほとんど《ほとんど》ないんだ。

IG: もう、やす、休みっていう\*\*、(IH: {笑}) \*\*\*\*\*(IH: あー、) 毎週ちょこっと、(IH: うん、うん) \*\*\*\*。\*\*\*\*\*

IH: 【ここで、近くに来た他の人に話しかける様子で】\*\*\*、あ、\*\*\*。あ、すいません。【IGのほうに向きなおった様子で】あー、別に休みって休みはとれないわけ？

IG: あー、もう20年は、\*\*\*\*、もう。

IH: あー、そうなの。すごいね。

IG: \*\*\*、\*\*\*\*\*

IH: だからかえって元気なんだよな。(IG: {笑} \*\*\*\*\*) ○○【IGの名前】さん、いくつよ。いくつよ。

IG: はい？ 80。

IH: 80。はあ。

IG: ええ。まあ80ちょっと越した。

IH: \*\*。へえ。あー、そうなんだ。ほお、80か。それで休みなしで働いてるわけだ。

IG: ええ。

IH: いろいろと。だから元気なんだよ。いつ見た<sup>ず</sup>って、あんたは元気だもん、びくとも、なに、俺、見でっけども。\*\*\*。

IG: \*\*\*\*、ええ。(IH: あー) まあ、今のうちはね。

### ■ 今日の話／日系団体の話 (22:40～)

IH: んーんー。へえ。【調査者の用意した話題表を見て】いや、「けさは何食べたか」って、これ、今日は、なんかまだ almoço 《昼ごはん》食べてないよね【ブラジルの朝食 (café da manhã) はコーヒーとトースト程度の軽食なので早めの昼ごはん (当日、県人会のメンバーは10時過ぎに昼食をとった) を「朝食」と解釈したか】。

IG: まだ。

IH: 朝飯はね。

IG: 今、今から。

【調査者（白岩）が「日本の研究者や大学生に聞かせる」と言って録音をしたので、次の IH の発話は、その聴取者を想定しながらの発話と思われる】

IH: 今からだよ、朝飯は。あー、そうだ。【調査者の用意した話題表を見て】  
「今日は何をする予定か」。今日は、こう、今ここで、あの、ちょうど Atibaia  
《地名：アチバイア》で花祭り、年中行事の花祭りやってるわけですよ。  
(IG: うん、そう) それがちょうど、ここで福島県人がちょうど売店を作  
って、そこで皆さん、あの、えーと、金曜日ど土曜日と、に、日曜日ね。(IG:  
日曜日、はい) ええ、さ、週 3 回、1 カ月やってます。それで今日は、まだ  
sex…【sexta feira《金曜日》の言いさしか】、あー、金曜日で、またみな  
さん、ここで、\*、みんな、今から、あの、働くことになっております。  
えーと…

{間} 【調査者の用意した話題表を長いあいだ眺めている様子】

#### ■ 東日本大震災の話 (23:50~)

IH: 【調査者の用意した話題表を見て】 あー、じ、日本の地震のことについて、  
なんか書いてあつけどね。あの、この前の震災ね、(IG: うん) 日本の東北  
の、(IG: はい) あれ、<sup>なん</sup>何で見ました? テレビで?

IG: そう、テレビ\*\*\*\*\*。

IH: テレビで。

【補足説明：東日本大震災とブラジル日系社会】  
66 ページ参照。

IG: そう。

IH: あー、テレビでね。あー、テレビで知ったわけよね。(IG: ええ) 私はちよ  
うど日本におったもんで。

IG: あ、そう。日本\*\*。

IH: ん、日本に、ちょうど日本におって、3 月 11 日だよ、(IG: あー) 震災あ  
ったのは。それで、4 月の 11 日に帰ってきたんだけど、私ちょうど日本  
におったもんで。なんか、こ、このことで、なんか日本、日本となんか連  
絡とった?

IG: えー、ちょっと、あの、福島県人会の本部【サンパウロにあるブラジル福  
島県人会の本部】とちょっと連絡とったよね。

IH: あ、あー、そうですか。

談話 7

IG: はい。それで、(IH: はい) 日本に、福島県の、どうせ、ど、どっちみち福島県の、おー、あ、その、\*\*\*だからね。(IH: あー、あー) で、向こうに連絡とって、向こうにちょっと寄付しようって言って、(IH: はいはい) あれしてね。(IH: はいはい) んで、少しやりました。

IH: あー、はい。あー、そう。あ、見舞金やったわけだ。

IG: うん、見舞で\*\*\*

IH: あー、そうですか。

IG: いちおうは出しました。

IH: あー、そうですか。えー、これから日本はどうなると思いますか。日本は。

IG: \*\*、日本…

IH: まあ、でもね、(IG: はい) いや、わからんけど、いや、俺たちはやっぱり日本人だから、心配だよな、日本のごどは、(IG: うん) ねえ。(IG: そうそう。まあ、日本のあれだからね、そうそう) やっぱり、肉親というか、あれもおるしね、親戚とかもおるし、やっぱり俺は、あー、おたくも、あ、3歳で来たってやっぱり日本生まれだから、俺も日本生まれでたくさん友達もおるし、ね、兄弟もおるし、心配は心配。でも、今後はどうなんだろうな。日本という国はもうできたときからああいう地震とか災害ってのはつきもんだよね。(IG: ええ、それ…) 昔から。大昔から。

IG: そうよね。\*\*\*\*\*

IH: んだから、んー、だから、今後どうなっか《どうなるか》っていうごど、まあ、でもいろんな、みんな頑張ってるし、日本の人っていうのは頑張り屋だし、そういうごどは、まあ、おそらぐちゃんと昔みたいに再建するだろうけどもね。(IG: うん) まあ、大変は大変だか知らんけどね、だから、ねえ。

IG: まあ、\*\*\*

IH: 俺たち、俺たちにし\*\*、俺たちは外国におっから別に心配なんだけど、ねえ。

IG: もう、しょうがないもんね。

IH: \*、俺たち、俺たち、だからって言って、何するっていうあれも、できれば何かしてやりたいけど、(IG: はい) でも、なかなかやっぱり、お互いになにかず生活あるしね。だから、ここで俺たちはただ見守ってるみだいだけでも、

できるごどあれば、やっぱりなにかしてやる…したいけどもね、なかなかあれだよ。でも、みんな頑張ってもらわんとね。心配は心配だよ、日本のごどは。俺たち、つらい。ま一、いつもなんか、テレビでニュースなんかを見でもね、いろんなごどあって、(IG: はい)「あー、どうしたかな」って、いつも心配してっけどね。だから、ね、だから今後早くね、復興してもらってね。もう。ただ、それは神に祈るだけだよ、俺たちは、ねえ、何もできないから。(IG: そうそう) それだけだよ。だから、できることあればね。うん。 \*\*

IG: いや、もう、日本、日本は日本でやっぱし、やりくりは上手<sup>じょうず</sup>にやるよね。日本 \*\*。

IH: あー、日本はやっぱり、うん。

IG: はい、みんな \*\* \*、 \*\* \* \* \* \*

IH: まあ、まあ、いろんな、ねえ、あれはあるけどね。うん。まあ、昔と違っていろいろ (IG: うん) 変わって \*\* \*、政治も変わってきてるしね、なんか。俺たち、 \*\*、テレビ見てっけどね。まあ、早く…、 \*\*、復興すればね、 \*\* \* \*。まあ、簡単じゃないだろうけどもね。(IG: ええ、そう) あれだけやられでっからね。まあ…

IG: \*\* \*、だいじょぶだよ。

IH: ま、だいじょぶだよ。

IG: あー、だいじょぶ、だいじょぶ。もう、はい。 \*\* \*

{間}

IH: \*\* \*だよ。まあ、祈る、それは祈るだけだよ、俺たちは。 \*、だから俺たちは、まあ、生きてるうちは日本のことは忘れないよね。よくなってもらいたいしね。

【ここから IG と IH の発話が大きく重なる】

IG: ええ、そうよね。

IH: そうでしょう？ 俺は日本人のごど \*\* \* \* \* \* 【「信じる」か】

IG: \*\* \*、やっぱり自分の生まれた土地<sup>とじ</sup>、ん、まだあれだしね。

IH: そうよ。自分の土地<sup>とじ</sup>だし。ね。

IG: だから、日本のことは、やっぱし、(IH: そうだよ) いつまでも守ってもらいたいよね、日本は日本としてね。

## 談話 7

{間}

【調査者（白岩）が「日本の研究者や大学生に聞かせる」と言って録音をしたので、次の IH の発話は、その聴取者を想定しての発話と思われる】

IH: ま、だから日本としては頑張ってるね、うん、(IG: そうそう) 一生懸命、大変でしょうけどね、頑張ってください。ね、私たちもブラジルから祈りますから。ね、福島県のことば。

IG: ねえ、そう。

### ■ 会話を終了する (28:20~)

IH: はい。\* \*、ね。どうもありがとうございました。はい。どうも。

IG: いえいえ、もう、こちらこそ、\* \* \* \* \* ました。

IH: よし、これで。

【IH が調査者（白岩）を呼んでくる】

{間}

白: もう、ありがとうございました。

IH: \*、一度…

白: はい。

IH: \* \* \*

白: あ、すいません。ありがとうございます。

IH: なんか、はっきり、俺のことばも、あんまり、あでん《あてに》ならんけども。

白: いやいやいやいやいや。

IH: \* \* \*、\* \* \*、いちおう日本語で話しましたから。

白: これ、聞いてみます。

IH: うんうん。{笑} ちょうど\* \* \*

## 分析例（論文）

この報告書におさめた談話を言語面から分析した例として、以下に1篇の論文を挙げる。この論文は、平成22～24年度科学研究費補助金・基盤研究（C）「日系人日本語変種の成立過程に関する言語生態論的研究」（代表者：渋谷勝己）の研究成果報告書（平成25年3月発行）におさめた白岩の執筆論文を再収録したものである（本報告書にあわせて書式や図表のレイアウトを一部変更しているが、文言の変更はしていない）。

この論文では、執筆した平成25年3月の時点で一定の整備が済んでいた談話1～談話4を対象に、ブラジル日系社会の福島県出身者、およびその2世が、西日本方言の文法形式をどのように受容しているかをまとめている。ブラジル日系社会の「コロニア語」は、さまざまな言語・方言が混ざりあって形成されているが、それはでたらめなまぜこぜではなく、ある程度規則だった体系を持つということを示した。

今後は談話5～談話7、および本報告書に未収録の談話をふくめ、さらに分析を充実させたいと考えているが、ひとまず、現時点で示すことのできる分析の一例としてお読みいただければ幸いである。

なお、言語研究の専門家以外にもわかりやすいよう、次ページに簡単なまとめを掲載したので、あわせてご参照いただきたい。

## 論文の概要

ブラジルの日系社会（コロニア）では、日本語とポルトガル語、そして、日本各地の方言が混ざりあったことばが、1世～2世の人たちを中心に使われています。このことばは「コロニア語」とも呼ばれており、一見すると、いろんなことばがでたらめに混ざっているように見えます。しかし、よく観察してみると、混ざりかたにも、きちんとルールがあることがわかります。私は日本語の方言が専門なので、特に方言の混ざりかたについて分析しました。

日本語の方言は（格段に特徴的な奄美・沖縄地方を別にすれば）東日本方言と西日本方言に分かれます。例えば、東日本方言では、「行かない」のように、否定表現にナイを使いますが、西日本方言では「行かん」のようにンを使います。人の存在を表すとき、東日本ではイルを使いますが、西日本ではオルを使います。これに関連して、動作の進行や結果を表すとき、東日本では「走ってゐる」のようにテル（テイル）を使いますが、西日本では「走っとる」のようにトル（テオル）を使います（地域と場合によっては「走りよる」のようにヨルを使うこともあります）。ここでは省略します。

さて、日本語の標準語は東京のことば、つまり、東日本方言なのですが、ブラジルに移住した人は西日本の人が多かったので、ブラジル日系社会では、西日本方言が広まりました。ここで対象にした福島県出身の人たちも、本来は東日本方言話者のはずなのに、西日本方言をかなり使っています。ただし、そこには一定のルールがあります。

例えば、否定表現として西日本方言のンが頻繁に使われていますが、ンが使用されるのは五段活用の動詞にかぎられます。五段活用とは、「行かない、行きます、行く、行けば、行こう」のように、動詞の根っこ（語幹）の部分が五段階に変化する動詞です。一方、「食べない、食べます、食べる、食べれば、食べよう」のように、動詞の根っこ（語幹）が変化しない動詞を一段活用動詞といいます。一段活用動詞では、ナイだけが使われており、西日本方言のンはほとんど使われません。

一段活用動詞でンが使われないのは、まぎらわしい表現が生じるのを避けるためと考えられます。例えば、一段活用動詞の「食べる」をンで否定した場合、もしこれに重ねて「じゃない」をつけて「食べんじゃない」などといってしまうと、まぎらわしい表現になってしまいます。つまり、「あの人は、甘いものは嫌いだから、お菓子なんて、ちっとも食べんじゃない（食べないじゃない）」という否定の意味にもなりますが、「あの人は、甘いものが好きだから、お菓子なら、たくさん食べんじゃない（食べるじゃない）」という肯定の意味に解釈されてしまうこともあります。「じゃない」がついたとき以外にも、「あの人はちっとも食べんね（食べないね）」「あの人はずいぶんよく食べんね（食べるね）」のように、一段活用動詞にンがついた表現は、まぎらわしくなってしまうがちなのです。だから、一段活用動詞でのンの使用は避けられるのだと考えられます。五段活用動詞の場合、「行かんじゃない」や「行かんね」が肯定の意味で解釈されることはありえないので、問題なくンが使えるのです。

このように、福島県出身者は西日本方言のンをとりいれていますが、まぎらわしい表現が生じないよう、無意識のうちにルールを作りながら、ンを使っているのだと考えられます。決してでたらめに方言を混ぜているのではなく、まぎらわしい誤解が生じないよう、言語としてのルールがきちんと存在するので

このほか、人の存在を表す動詞として、西日本方言のオルが数多く使われていますが、

(1) 丁寧形だけはイルを使う（イマスと言い、オリマスとはあまり言わない）

(2) 否定のときだけイルを使う（イナイと言い、オランとはあまり言わない）

というルールもあります。また、オルは多くの人が使っているのに、動作の進行・結果を表すトル（テオル）は使う人が少ない、という傾向も見られます。

細かなことは論文の本文を見ていただきたいと思います。でたらめに方言が混ざっているように見えて、実はルールが存在する……ということを発見できたのが、この論文の成果といえます。

## ブラジル日系社会における方言接触

## ——否定形式・存在動詞・アスペクト形式に注目して——

白岩 広行

## 1. はじめに

本稿では、ブラジル日系社会における言語接触の様相を、日本語の方言差に視野をあて、実際の自然談話資料をもとに記述する。ブラジル日系社会では、2世以下の世代でポルトガル語へのモノリンガル化が進んでいるものの、現在高齢になった1世を中心として、日本語の様々な方言やポルトガル語が混交して使われている。この言語接触の様相については、これまでも様々な研究がなされているが、当地の状況を考えるうえで「日本語」をひとつの均質な言語と見なすのは適当でない。戦前・戦後を通じてブラジルに移住した人々の出身は多様だが、特に九州・中国地方を中心とした西日本各県の出身者が多数を占めている。移民が奨励された時期に標準語が普及していなかったことを考えても、当地の日系社会で使われている「日本語」が、いわゆる標準的な日本語でないことは明らかで、西日本方言的な特徴の見られることが数多く指摘されている(2節で詳述)。

これをふまえ、本稿では、特に東日本出身者がブラジル日系社会においてどのような方言接触を経験したかを記述する。端的な例として以下に示すのは、筆者の収録した福島県出身1世のIA氏の談話である(【 】で文脈の補足を、《 》でポルトガル語の日本語訳を入れた。カッコ書きで「白：」と示したのは、調査者白岩のあいづち)。

- (1) 【初めてサンパウロに来たとき「サンパウロ」という名の駅がなくて戸惑った話】

IA：俺は、俺は当然 São Paulo 《サンパウロ》っていう駅があると思っとったんだ。(白：ええ、ええ {笑}) それで、あの一、もう estação 《駅》から、ふたつぐらい手前【手前の駅】で、こんなして《こんなふうにして》、歩くんだよ。「切符、置いてくれ」って。(白：あ一、あ一、あ一、あ一)「Não 《いや》、俺はやらん」って。俺は、「Sa…、ん、São Paulo 《サンパウロ》まで、つぎ、どご estação 《駅》だ」って言うんだよ。Luz 《駅名：ルス》【長距離列車の終着駅】だどが、なんとが」って。(白：あ一、Luz 《ルス》)「Não 《いや》、俺は São Paulo 《サンパウロ》行く」{笑}(白：{笑})とうとう、やらんかったんだよ。もう、手、上げて、

帰ってったよ。(白：{笑}) {笑} そして、今度は、しとり人<sup>しとり</sup>なったの。終点に来たら。(白：あー)「降りろ」っちゅうわけだよ。(白：あー、あー、あー)「俺は São Paulo 《サンパウロ》行くんだ」って(白：あー、あー、あー)手まねで言うわけだ。「Não. São Paulo aq, aqui 《いや、サンパウロはここ》」って言うわけだ。(白：「São Paulo aqui 《サンパウロはここ》」{笑})「ごごだがら降りろ」っちゅうわけだ。どうしても、しょうねえ《しょうがない》がら、出てみたら、前は、こう、【線路が】ないんだもん。{笑} (白：{笑})

この例で示したとおり、IA 氏はカ・タ行子音の有声化（オイテクレ>オイデクレ、イク>イグ、ココダガラ>コゴダガラ）、ヒ音の歯茎硬口蓋音化（ヒトリ>シトリ）など、音声面では福島方言の特徴を残しているものの、アスペクト形式のトル（思っと思った）、否定形式のン（やらん）など、文法面で西日本方言の影響を受けている。ただし、アスペクト形式や否定形式として西日本方言形だけを用いているわけではない。

(2) 【福島にいたころ、農協の仕事をしたときの話】

IA：僕らの来るときや【ときは】ね、(白：うん) えー、この一、いや、もう、だいぶ遊んだし、あっち歩きこっち歩き、今言ったように、えー、今度あの、学校終わって、仕事の、ちょ、ちゃんと入ってないから、(白：うん) あっちこっちやったりね、(白：ええ、ええ) 体の調子悪くなったりして、休んで半年ぐらい、ぶらんぶらんしとったんかな、うちで。したら《そしたら》、\*、農協に「是非」組合長からつかまれて、「3日でもいい」っていうんだよ。して《そして》、親父「そういうの、お前、3日でも行って\*て、できなかつたら腰かけとるだけでいい」っつーんだよ。

(3) 【じゃがいも畑の仕事がきついと知ってブラジル行きの決心が鈍ったときの話】

IA：で、ま、親から「行くな」、兄弟から「行くな、行くな」\*やつ、やっつと、んー、納得してもらってブラジル行くように決まって、今さら、その Cotia 《コチア》移民の、ね、(白：ええ、ええ) えー、じゃがいもかざ担<sup>かざ</sup>ぎできねえがらって、そのやめるわけいかんし、「どうするか」と考えて、しとばん一晩。

## 分析例

(2) (3) の例に示すとおり、アスペクト形式としては東日本方言のテル（入ってない）と西日本方言のトル（ぶらんぶらんしとった、腰かけとる）が、否定形式としては東日本方言のナイ（入ってない、でぎねえ）とン（いかん）が併用されている。

本稿では、これらの事象をとりあげ、東日本方言と西日本方言の形式がどのような言語内的／言語外的要因によって使い分けられているかを記述する。東日本出身者が西日本方言形を受容していることはこれまでも指摘されているが、本稿では、自然談話の資料をもとに、より具体的な要因から使い分けの基準を明らかにする。

分析項目としては、動詞の否定形式、存在動詞およびアスペクト形式に焦点をあてる。これは、日本語の東西の方言差として代表的な言語項目であり、ブラジルの日本語に関する先行研究でも西日本方言的な特徴として否定形式のン、存在動詞のオル、アスペクト形式のトル・ヨルなどの使用が特に指摘されているためである。

また、記述にあたっては東日本各県のなかでも、特に福島県の出身者およびその子どもである 2 世を中心に考察をおこなう。ここで福島県出身者に主眼を置く理由は以下の 2 点にある。

- (a) 東日本各県のなかで福島県出身の移民は特に数が多い
- (b) 筆者自身が福島県の出身であり、調査にあたって福島県出身者のコミュニティに入りやすかった

以上で述べたように、本稿では、福島県出身者の自然談話資料をもとに、否定形式、存在動詞・アスペクト形式という言語項目について分析し、東日本出身者がブラジル日系社会でどのように西日本方言を受容したか、その方言接触状況の一端を言語的な側面に注目して記述する。以下、2 節では移住者の出身県について簡単に示したのち、ブラジル日系社会での方言接触に関する先行研究を整理する。3 節では自然談話資料の概要について示し、4 節で具体的な分析をおこなう。5 節で他の方言接触の事例（ボリビア沖縄系社会）と対照をし、6 節でまとめとする。

## 2. 先行研究：移住者の出身県と方言接触について

ここでは、移住者の出身県について簡単にまとめたうえで、それに起因する日系社会内の方言接触について先行研究を整理する。

日本からブラジルへの移住は 1908 年に始まるが、その様相は戦前と戦後で大きく異なる。戦前の移住は第二次大戦直前の 1941 年まで続くが、それは永住を目的としたものではなく、ほとんどの移住者はブラジルで一稼ぎしたのちに日本へ帰国する意志を持っていた。戦後は 1953 年から移民の送出国が再開され、60 年代初めまで毎年数千人規模で日本人のブラジル移住が続くことになるが、その多くはブラジルでの永住を意図したものであった。戦前からいた移住者も、

戦後は永住を決意し、ブラジル社会への同化を目指してゆくようになる。これは敗戦により凋落した日本社会への失望感などによるもので、戦時中の日本語弾圧（ブラジルは連合国であった）などの影響もあり、戦後はポルトガル語への言語シフトが進んでゆく（永田 1991a、工藤ほか 2009 など参照）。

このような状況から、一般的にブラジルへの移住者は「戦前移民」と「戦後移民」に分けられるが、戦前・戦後を通じて、東日本出身者より西日本出身者が多かったことが知られている。本稿であつかう否定形式、存在動詞、および存在動詞に由来するアスペクト形式については、図 1 に示すとおり、おおよそ新潟県・長野県・静岡県西部を境に東西で使用語形が分かれる。これをふまえて、新潟県・長野県・静岡県以東を「東日本」、富山県・岐阜県・愛知県以西を「西日本」、また、本土方言と大きく仕組みの異なることばが話される「沖縄」を分けて、出身県別に移住者数をまとめると表 1、表 2 のようになる。

表 1 は石川（1989:15）に記載の表をもとに筆者が作成したもので、戦前移民（1940 年時点でのブラジル在留者）の出身地を「東日本」「西日本」「沖縄」「樺太」に分けたうえで、移住者の多い上位 10 県については「内訳」としてその内数を示している。表 2 は、表 1 と同様の形で、国際協力事業団の『海外移住統計』（1994 年）をもとに戦後の移住者数を旅券発給県別に示したものである。

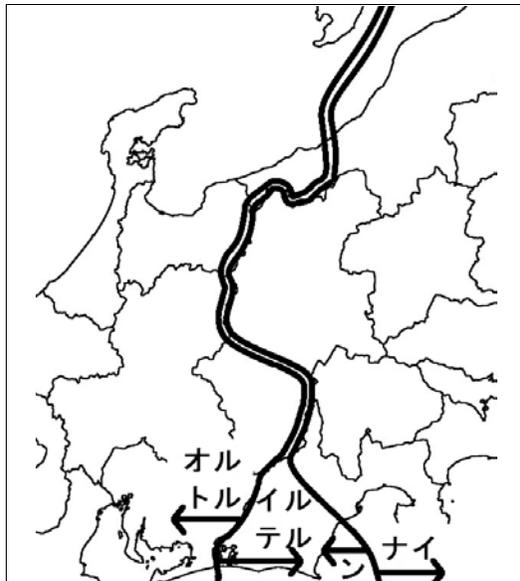


図 1 否定形式・存在動詞の東西境界線<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 否定形式については『方言文法全国地図第 2 集』の図 80「書かない」、存在動詞については『日本言語地図第 2 巻』の図 53「いる」、アスペクト形式については『方言文法全国地図第 4 集』の図 199「散っている（結果態）」をもとに、筆者が作図した。アスペクト形式について、進行態でヨルを用いる地域が西日本に広く存在するが、本稿であつかう資料にヨルはほとんど見られなかったので、ヨルの分布は省く。また、境界線を挟んで両語形の併用地点などもあるので、あくまで分布を簡略化したものとして理解されたい。

分析例

表 1 1940 年時点での出身県別ブラジル在留者数

移住者数	
東日本	56926 (29.5%)
(内訳)	
北海道	11791
福島県	10738
その他	34397
西日本	119187 (61.7%)
(内訳)	
熊本県	21482
福岡県	17698
広島県	12983
鹿児島県	6112
岡山県	5777
山口県	5709
高知県	4527
その他	44899
沖縄	16287 (8.4%)
樺太	62 (0.0%)
不詳	694 (0.4%)
総計	193156

石川友紀 (1989:15) の表をもとに作成

表 2 戦後の旅券発給県別移住者数

移住者数	
東日本	18383 (34.3%)
(内訳)	
東京都	3590
北海道	3228
福島県	2341
その他	9224
西日本	29096 (54.2%)
(内訳)	
熊本県	3771
福岡県	3550
長崎県	2898
山口県	1934
鹿児島県	1616
和歌山県	1615
その他	13712
沖縄	6178 (11.5%)
総計	53657

『海外移住統計』(国際協力事業団、1994年)をもとに作成

表1、表2を見ればわかるとおり、戦前・戦後を通じて、移住者の出身地は西日本であることが多く、西日本出身の移住者数が東日本出身者のおよそ倍を占める。特に福岡・熊本・鹿児島などの九州各県、広島・山口などの山陽地方各県は多くの移住者を送り出しており、「移民県」として知られている。一方、東日本で多くの移住者を送り出しているのは北海道および福島県だが、北海道の場合、全国から集まった開拓者の再移住という性格がある。また、戦後は東京都で旅券の発給を受けた移住者も多いが、東京が人口の集積地であることを考えると、これらの移住者も東京都出身とはかぎらない。それらの点を考慮すると、福島県が東日本では随一の「移民県」であったことが考えられる。つまり、ブラジル日系社会では西日本出身者が多数を占める一方で、東日本出身者としては福島県出身者が比較的まとまった数で存在していたということになる。

このような出身地の違いを反映して、ブラジル日系社会で使われる日本語が西日本方言的な性格を帯びていることは、数々の論者によって指摘されている。

まず、動詞の否定形式としてンが多用されていることについては野元(1969a; 1969b)、長尾(1977)などの指摘がある。

- (4) 七月号にも書いたように、打ち消しの助動詞には「ん」が好まれているようだ。これは子どもの作文にも現われる。

「ぼくは雨ふりがすかんです。／なしてかといったら、／ブランコにのれんし、／すべりだいもすべれんし、／……」

という次第だ。

(野元 1969b:71)

また、存在動詞としてオルが多用されることも、野元(1969b)、鈴木(1982)などで指摘されている。

- (5) 規範のゆるみは、また方言の混入を許すことにもなる。移住した人々が、熊本や広島など、中国・九州・沖縄あたりの出身者が多数を占めていたので、混入している方言も圧倒的に西部方言が多い。

書きことばには、さすがに余りみられないが、日常的な語を多く使う日本語学校の生徒の作文には、時々顔を出す。一番多いのは「おる」である。

○三日おつてうちへかえったときは、たいへんつかれました (S 5・13)

○ブラジル国にこうけんされた事がみとめられておる結果と思うのであります。(S 4・19)

以上は目についた例を挙げたエピソード的な指摘だが、永田(1991b)はパラナ州アサイ移住地でおこなった多人数調査から、西日本方言形の使用者が多いことを示している。本稿に関わる各項目について永田(1991b)の調査結果を示すと以下の表のようになる。アサイ移住地は全国各地からの移住者が混住する移住地だが<sup>2</sup>、西日本方言形の否定形式ン、存在動詞オル、アスペクト形式トル・

<sup>2</sup> 永田(1991b)によれば、北海道・福島県の出身者が約10%を占める。

## 分析例

ヨルが、東日本方言形（＝標準語形）と併用されつつ、かなりの割合で使われていることがわかる。

表3 アサイ移住地における動詞否定形式の各使用者数（永田 1991b:169 より）<sup>3</sup>

	ン	ン/ナイ	ナイ	計
一世	15 (50.0)	2 (6.7)	13 (43.3)	30
準二世	9 (47.4)	2 (10.5)	8 (42.1)	19
二世	18 (52.9)	1 (2.9)	15 (44.1)	34
三世	2 (40.0)	0 (0.0)	3 (60.0)	5
	44 (50.0)	5 (5.7)	39 (44.3)	88

表4 アサイ移住地における存在動詞の各使用者数（永田 1991b:177 より）

	オル	オル/イル	イル	計
一世	19 (65.5)	2 (6.9)	8 (27.6)	29
準二世	15 (78.9)	1 (5.3)	3 (15.8)	19
二世	19 (55.9)	4 (11.8)	11 (32.4)	34
三世	3 (60.0)	1 (20.0)	1 (20.0)	5
	56 (64.4)	8 (9.2)	23 (26.4)	87

表5 アサイ移住地におけるアスペクト形式（進行形）の各使用者数（永田 1991b:170 より）

	ヨル	トル	テル	ヨル/トル	ヨル/テル	ヨル/チョル	計
一世	1 (3.2)	2 (6.5)	15 (48.4)	6 (19.4)	5 (16.1)	2 (6.5)	31
準二世	5 (27.8)	1 (5.6)	6 (33.3)	3 (16.7)	3 (16.7)	0 (0.0)	18
二世	3 (8.8)	3 (8.8)	12 (35.3)	4 (11.8)	12 (35.3)	0 (0.0)	34
三世	2 (40.0)	0 (0.0)	2 (40.0)	0 (0.0)	1 (20.0)	0 (0.0)	5
	11 (12.5)	6 (6.8)	35 (39.8)	13 (14.8)	21 (23.9)	2 (2.3)	88

これらの西日本方言形が東日本出身者にも使われていることを、永田(1991b)は「東日本出身の一世でもオルを使い、日系社会の共通語になりつつある。

(p.176)」と指摘している。また、中東(2006)が宮城県出身者、井脇(2005)が北海道・福島県・茨城県・東京都・長野県などの出身者について、西日本方言形の使用が認められることを取り上げている。

以上、ブラジルの日系社会では、西日本方言形として動詞の否定形式ン、存在動詞オル、アスペクト形式トル・ヨルが広く使われており、東日本出身者も

<sup>3</sup> カッコ内の数字はその世代での該当する回答者の割合。「ン/ナイ」は両語形の併用を表す。日本で生まれたものの、幼年期にブラジルに渡航し、ブラジルで生育した世代を「準二世」としている。以下の表4、表5も同じ。

西日本方言的な特徴を受け入れていることが先行研究の記述から読み取れる。しかし、東日本方言形（＝標準語形）のナイ、イル、テルなども併用されており、どのような言語内的・言語外的条件によって東西の方言形式が使い分けられているかは十分に明らかでない。そこで、以下、本稿では、自然談話資料を対象とすることによって、東日本出身者がどのような形で西日本方言形を使用しているか、より具体的な要因について分析する。

### 3. 談話資料の概要

談話収録調査はブラジル福島県人会の協力により 2012 年 3 月におこなった。収録談話の一覧を以下の表に示す。いずれの談話も収録・文字化した時間数は約 30 分である<sup>4</sup>。

このうち、談話【01】は調査者の白岩が IA にインタビューをし、同席者の IB が合間に発話する形で進めた談話である。IB の発話量は極端に少なく、出身地も異なるため、本稿の分析対象からは外すことにする。そのほかの談話【02】【03】【04】は、話者同士が 1 対 1 で自然に会話したものである。

話者はみなブラジル福島県人会の会員・関係者であり、県人会の集まりで顔を合わせる知人同士である。談話【01】【03】【04】には丁寧体の発話もある程度見られるが、おおむねカジュアルなスタイルの談話となっている。文字化した資料の一部を本稿末尾に掲げたので、そちらも参照されたい。

表 6 収録談話一覧（1 世）

談話番号	話者	生年	性別	出身地	渡航後の主な居住地	渡航年齢	主な職業
【01】	IA	1933	男	福島県郡山市	Mogi das Cruzes	24 歳	農業
	IB*	1935	男	山形県長井市・山形市	São Paulo	18 歳	商工業
	白岩	1982	男	福島県福島市			(調査者)
【02】	IC	1935	男	福島県白河市	ブラジル中を転住	24 歳	農業
	ID	1947	男	福島県大玉村	São Bernardo do Campo	27 歳	技師

\*IB は発話量が極端に少なく出身も異なるため分析対象としない

<sup>4</sup> 談話【01】は約 60 分録音したが、文字化が済んでいるのは約 30 分であり、本稿では文字化済みの約 30 分のデータを分析対象とする。

## 分析例

表 7 収録談話一覧 (2 世)

談話 番号	話者	生年	性別	出身地	父の出身	母の出身	主な職業
【03】	NA	1934	男	São Paulo	福島県 会津美里町	石川県	会社員
	NB	1956	男	Itapecerica da Serra	福島県 南相馬市	東京都	会社経営
【04】	NC	1944	男	Mogi das Cruzes	福島県 いわき市	福島県 いわき市	会社員* (日系企業)
	ND	1945	男	Mogi das Cruzes	福島県 いわき市	福島県 いわき市	会社員* (日系企業)

\*NC、ND は日本に本社を置く企業のブラジル支社ないし子会社で勤務

### 4. 分析

本節では、具体的な言語項目として動詞の否定形式 (4.1 節)、存在動詞 (4.2 節)、アスペクト形式 (4.3 節) のそれぞれを取り上げ、ナイ／ン、イル／オル、テル／トルの使い分けに関わる要因を分析する。そのうえで 4.4 節でまとめをおこない、言語内的・言語外的条件から使い分けのあり方を整理する。

#### 4.1 動詞の否定形式

まずは、話者ごとの区別をせず、言語内的な要因から否定形式の使用状況について整理する。表 8 は、動詞の活用ごとに使用される否定形式をまとめたものである<sup>5</sup>。

<sup>5</sup> 受身・可能形式の(ラ)レル、アスペクト形式のテルなど、一段型の活用をする助動詞類に後接したものは、一段動詞に後接した例に含めて集計している (4.3 節で示すとおり、同じアスペクト形式でもトル・ヨルに否定形式の後接した例はなかった)。

(例) NC: 家のほうはあんまり空けられないっていうこともあって

(例) IC: まあ、俺、お金、自分で払ってないから。

また、丁寧体のマスに後接したンの用例 7 例は集計から省いている (そもそもナイが生起する環境ではなく、使い分けの有無を議論しえないため)。

(例) NA: だけど、ことばで、だから *Português* 《ポルトガル語》とか日本語で、苦労したつつーことは、ねー、全然ねー、覚えがありませんね。

ナイ／ンがそれぞれ活用したナカッタ、ナクテ／ンカッタなどの例は、それぞれナイ／ンにふくめて集計している。ナイの連母音が融合したネーという語形もナイにふくめて集計している。

表 8 動詞の活用と否定形式の使用

	ナイ	ン
五段動詞	39	35
一段動詞	63*	4*
サ変動詞	12	6
カ変動詞	6*	0*
	121	45

符号検定の結果、両形式の使用数に  $p < 0.05$  水準で有意な差が見られた項目に\*を付す

この表に示すとおり、西日本方言形ンの使用は、ほとんど五段動詞とサ変動詞の場合にかぎられており、一段動詞では基本的にナイのみが使用されている。以下、実際の使用例を掲げておく。

(6) 【老後の計画について話している】

ND：もう、あの、あの、つまらない人生を送ってもしょうがないからね。もうあと、何年あるかわかんないからね。

NC：お迎えは、神様にお任せしとかなないといかんからね。{笑}

ND：そうそうそう。まあ、5年、10年、20年かわからんけど、(NC：はいはい)でも、やっぱり元気なうちにね、(NC：そう\*\*)あの一、できるだけ、す、好きなこと、あの、や、やってみたいと思ってますけど\*。 【五段動詞：ナイ・ンの例】

(7) 【一緒にブラジルに来てくれる嫁を探したときの話】

IA：親戚とか知り合いのとこ、昼も夜も歩いて《回って》、「いいのはいねえが」と、「ブラジルへ行くんだ」って、何回も歩くけど、「ブラジルまではね」って言われてさ {笑} (白：{笑}) いねえんだって。 【一段動詞：ナイの例】

(8) 【子供のころのポルトガル語使用について】

NC：我々日系2世、特にあの、いなか育ちは、要するに家庭での会話っちゅーの、すべて日本語だったんだよ。(ND：そうだね)だから、ポルトガル語のほう、あんまりこう、うまぐね、できなかったね。対応うまぐできない場合が多かったんだよね。【中略】頭んなかで思ってるような、(ND：うん) あー、表現っつーのあんまりできなかった。(ND：ええ)日本語ではできたんだよね、あの一、変な話\*\*\*。だけど、ポルトガル語では出てこないと (ND：そうだよ、んー) ということで、苦労したほうだけれどもね。 【一段動詞・カ変動詞：ナイの例】

(9) 【今の日本の若者は甘やかされているという話】

NB：まあ、みんな、アメリカ人と似た、似たよ…ものになってきてるんだよね。(NA：はいはい)それで、まあ、それくらべると、ま

## 分析例

あまあ、そういうのは、まあ、その人が、まあ、動かない、運動せん。「なんでせん」っていう、

【中略】

NA：甘やかされてね、だからもう、そういうふうなってきたらね、あんまり、仕事も、し、ねー、

NB：しないね。{笑}

【サ変動詞：ナイ・ンの例】

五段動詞でナイとンが併用される一方、一段動詞でンが使われないことについては、他の表現との語形の衝突が要因として考えられる。福島方言では<sup>6</sup>、一段動詞およびラ行五段動詞のように、終止形がルで終わる動詞に準体表現のノ、終助詞のナなどが後接した場合、動詞末尾のル音が撥音（ン）になることが多い。具体的な動詞（一段動詞「できる」、ラ行五段動詞「掘る」）を例に挙げると、「デキンノ<デキル+ノ>」「デキンナ<デキル+ナ>」、「ホンノ<ホル+ノ>」「ホンナ<ホル+ナ>」などのような形でル音の撥音化が生じる。そのため、一段動詞で否定形式にンを使用した場合、動詞の否定形とこれらの語形が同形となる。実際の使用例を下に掲げるが、この例では、一段動詞「できる」の否定形式としてナイを用いているので、否定の表現であることが明らかである。しかし、もし仮に「できる」の否定形式としてンを使用した場合、「デキンノ」という語形が「デキル+ン（否定）+ノ（準体）」なのか、「デキル+ノ（準体）」なのか、文脈の支えがないかぎり、区別がつかなくなる。

(10) IC：百姓でも、作ったもの、自分でこれ、こうじゃあ、できないの。

(\*できんの)

一方、五段動詞の場合、ラ行活用以外では撥音化は生じないし、ラ行活用であっても否定の形は「ホランノ」、「ホル+ノ」の形は「ホンノ」であって、語形の衝突は生じない。このように、動詞末尾のル音が撥音化した語形との衝突を避けるため、一段動詞ではンがほとんど用いられないのではないかと考えられる。

以上は言語内的な条件づけによるンとナイの使い分けであったが、次に、言語外的な条件として話者ごとの違いについて考える。ナイとンが併用される五段動詞・サ変動詞について、話者ごとの否定形式の使用状況を表9にまとめる。話者ごとに分けた場合、用例数が少なく、特にサ変動詞についてははっきりした傾向が見えないが、五段動詞については一部の話者で使用傾向を確認することができる。

<sup>6</sup> おそらく福島方言以外にも、東日本の多くの方言で同様の事象があるものと思われる。

表 9 五段動詞・サ変動詞における話者ごとの否定形式の使用

		五段動詞		サ変動詞	
		ナイ	ン	ナイ	ン
1 世	IA	1*	23*	2	2
	IC	2	2	3	0
	ID	3	0	2	0
	NA	3	4	1	0
2 世	NB	16*	1*	3	4
	NC	7	2	1	0
	ND	7	3	0	0
		39	35	12	6

符号検定の結果、両形式の使用数に  $p < 0.05$  水準で有意な差が見られた項目に\*を付す

IA は五段動詞の否定形式としてほぼンのみを用いており、全 24 例中 1 例しかナイを用いていない。一方、2 世の NB はほぼナイのみを用いており、ンは全 17 例中 1 例しか見られない。他の話者については、統計的に有意なほどの差は確認できないが、NB と同様に 2 世の話者でナイを多く使用する傾向が見られる。この傾向が 2 世に一般的なものとはかぎらず、社会的な要因については様々に考慮する必要はあるが、2 世の話者は言語形成期に日本語学校に通っていたことが、各話者の談話内容から確認できる。

(11) NC : まあ、日本学校はね、子どもころから、ずっと、まあ、7 年間、\*\*9 年ぐらいかな、通わしていただいて、で一、たまたま、まあ、そんな環境のなかだったんで、「読むこと」「聞くこと」ちゅうのは全部やっぱり、漫画とか本はみんな日本語だった\*\*ね。

ND : そうだよねー。(ND : ええ) んー。だ、そのへんがねー、あの、私らの時代っつーのは、日本語覚えるのは、非常に、あの一、NC : 恵まれてた。

(12) NB : まあ、僕たちはね、子どもたちはね、\*\*、まあ、日本学校はね一、まあ、東京の使うことばっていうのを教えよったからね。

NA : あ、標準語ですよ。あ一。

また、表 7 で示したとおり、NC・ND は日本に本社を置く企業のブラジル支社・子会社で長らく勤務しており、仕事上、日本から来た駐在員や日本在住の日本人に接する機会が多かったと考えられる。ほかにも様々な要因はあるだろうが、このような日本語学校や日系企業での経験から標準的な日本語変種にふれる機会が多く、標準語形としてのナイを使う頻度が高くなったのではないかと考えることができる。

## 分析例

### 4.2 存在動詞

次に、存在動詞の使用状況について整理する。先に全体の用例数について確認するが、存在動詞の全 57 例のうち、イルは 22 例、オルは 35 例と、オルの使用頻度のほうが高い<sup>7</sup>。このうち、イルは述語の丁寧さや肯否によって条件づけられたときにのみ使用される傾向にある。表 10 に示すとおり、存在動詞がマスを後接して丁寧体になった例は 7 例見られたが、いずれもイルの例であり、オルがマスを後接した例は見られなかった<sup>8</sup>。

表 10 述語の丁寧さ・肯否によるイル／オルの使い分け

丁寧さ	肯否	イル	オル
丁寧体（～マス）		7*	0*
非丁寧体	肯定	8*	32*
	否定	7	3
		22	35

符号検定の結果、両形式の使用数に  $p < 0.05$  水準で有意な差が見られた項目に\*を付す

- (13) NB: ま、ブラジルだけじゃないよね。全国なんだよね、それは。(NA : うん) まあ、ほんとに、今の、まあ、僕は子供もいますけどもね、

丁寧体の表現は標準語的なものと見なされ、標準語形としてのナイが用いられているものと考えられる。

また、非丁寧体の場合でも、述語が否定の形をとる場合にはイルが用いられやすい。下例のように、イナイという形の例が 7 例見られた<sup>9</sup>。一方、オルが否定の形をとった例は 3 例しかなく、ンを後接した例が 2 例、可能表現としてオレナイという形をとった例が 1 例見られた<sup>10</sup>。

- (14) IC: 【不当な条件で】仕事する、んな、Cotia 《コチア》の馬鹿がいないよ、誰も。

- (15) 【最近の日本の学生は留学をしないという話題】

<sup>7</sup> このほかイラッシュルが 1 例のみ見られたが、分析対象からは除くことにする。

<sup>8</sup> 下例のようにデス（デショ）を後接した例が 1 例見られたが、マスを後接した例のみを「丁寧体」としてあつかった。

(例) IA: あれよ、あの、ん、カツギアリつって、あの、葉っぱを切って、（白: ええ、ええ）持って、かえ、持って、巢に持ってぐやつおるでしよ。

<sup>9</sup> 否定形式としてンを後接した「イン」という例は見られなかった。これは 4.1 節で見たように、一段動詞にはんが後接しにくいためと考えられる。調査時以外の筆者のブラジル滞在期間を通して、当地の日本語として、「イン」という表現は耳にした記憶がない。

<sup>10</sup> オレナイの例をのぞけば、否定形式としてナイを後接した「オラナイ」という例は談話資料中には見られなかった。ただし、筆者のブラジル滞在中、「オラナイ」という表現を使用する話者は、福島県出身者を含めて何人かいたことを記憶している。

NA : あんまり外国で勉強しようつつうのはね、(NB : うーん) 今はもう、{咳} あの、たった、全体のが、男の学…、2割しかいない いちゅうんですよね。【中略】今の日本は、ほんと減っちゃってね、ほとんど、ねー、おらんつつってましたよね。

(16) 【震災で避難した親戚の話題】

NB : 仕事し、まあ、やってますけども、まあ、だけども、自分のふるさとで、{笑} ねー、(NA : んー) んー、…のに、おれないっていうことは、つらいみたいらしいね。

以上のように、イルの使用はオルに比べて少なく、特に (a) マスを後接して丁寧体になる、(b) イナイの形で否定になる、の2つの場合に使用がかぎられる傾向が見られる。

次に、ある程度まとまった数の用例がある「非丁寧体」かつ「肯定」の場合について、話者ごとの使用傾向を見る。

表 11 非丁寧体・肯定の場合の話者ごとの存在動詞の使用

		イル	オル
1 世	IA	0*	14*
	IC	1	5
	ID	0	0
		NA	2
2 世	NB	1*	8*
	NC	2	3
	ND	4	0
		8	32

符号検定の結果、両形式の使用数に  $p < 0.05$  水準で有意な差が見られた項目に\*を付す

(17) IA : 出て、体の調子悪くて、(白 : あー) 田舎へ帰って、3年ぐらい おったかな。2年ぐらい おったんかな。

(18) ND : うん。○○【NC の名前】さんは福島にまだ親戚は いるんですか？

NC : いや、親戚ね、親戚はね、あの一、連絡は\*\*\*ないんですけども、んー、いわき市のほうには、あの一、いわゆる私のね、えー、父の、お、まあ甥 (ND : 甥。うん) になる、それ、その程度のレベルの、(ND : うん、うん) まあ、家族関係っていうのね、まあ、おるんですけど、ほとんどもう、連絡がないんですけどね、(ND : あー、なるほどね) ただまあ、地域的に離れてるんで、(ND : ええ) これと言った問題はなかったというふうに思いますけどね、(ND : \*) これはあの一、逆に、ブラジルに おる親

## 分析例

戚からの話の、あの、…からでは、ではね、  
そもそもイルの使用数が少ないため、はっきりした傾向はつかめないが、1世話者がほとんどオルを用いているのに対し、2世話者はある程度の割合でイルを使用している。4.1節で述べたとおり、2世は日本語学校や日系企業での勤務経験から標準的な日本語変種に接する経験が多く、標準語形としてイルを用いているのではないかと考えられる。

### 4.3 アスペクト形式

ここでは、存在動詞の分析結果をふまえて、アスペクト形式の使用状況についてまとめる。アスペクト形式としては、テルが167例、トルが32例、ヨルが3例見られた<sup>11</sup>。後述するが、ヨルはNBが3例使っているだけなので、ひとまずテルとトルの使用状況にかぎって整理をおこなう。

表 12 述語の丁寧さ・肯否によるテル／トルの使い分け

丁寧さ	肯否	テル	トル
丁寧体（～マス）		50*	1*
非丁寧体	肯定	108*	31*
	否定	9*	0*
		167	32

符号検定の結果、両形式の使用数に  $p < 0.05$  水準で有意な差が見られた項目に\*を付す

全体的にテルの用例数が多く、トルの用例数は少ないが、表 12 としてまとめたとおり、特に丁寧体の場合、および否定の形をとる場合には、ほぼテルのみが用いられる。これは存在動詞としてイルが用いられるのと同様の条件である。以下、用例を示しておく。

(19) NB：あ、あの人の一、お母さんたちにみんなお世話になってますよね。

(20) IA：あそごに、〇〇【学校名】ってあったんだよね。（白：あー）そごの電気科をやったんだけど、（白：あ）電気\*\*なんか、なんにも覚えてないね、いま。{笑}

丁寧体でトルが用いられる例は1例のみ見られたが、それは下に示すとおり～テオラレマスという形で用いられたもので、トルに直接マスが後接したトリマスという形での使用例は1例も見られなかった。

(21) NC：あ、〇〇【人名 F】さん。野球の、なんかね、コーチやっておられましたね。

<sup>11</sup> テイル（4例）、テオル（4例）は、それぞれテル、トルにふくめて集計する。このほか、尊敬語のテラッシュルが1例見られたが、分析対象からは除く。

また、テルが否定の形をとる場合、否定形式として使われているのはナイであり、ンをういた例は見られなかった。これも存在動詞イルの使用と同様の傾向である。

以上のように、アスペクト形式としては基本的にテルが用いられており、トルが用いられるのは、「非丁寧体」かつ「肯定」の場合にかぎられる。次に、この「非丁寧体」かつ「肯定」という条件の場合、各話者がテル、トルのどちらを使用しているかを表 13 にまとめる。

表 13 非丁寧体・肯定の場合の話者ごとのアスペクト形式の使用

		テル	トル
1 世	IA	3*	20*
	IC	28*	1*
	ID	6*	0*
		NA	18*
2 世	NB	16	8
	NC	17*	2*
	ND	20*	0*
		108	31

符号検定の結果、両形式の使用数に  $p < 0.05$  水準で有意な差が見られた項目に\*を付す

アスペクト形式の使用数は全体的に多いので、話者ごとに分けても一定の用例数が得られるが、表 13 に示すとおり、トルを用いるのは IA のみである。それ以外の話者については、ある程度トルを使用する NB を除いて、ほとんどテルのみを用いている。

(22) IA : うちの\*\*\*\*、郡山から二本松のあいだ歩いとった《移動してた》だけで、郡山で働いとったんだげどな、

(23) ID : あー、あのころ【移民を】募集してたもんね。いっばいね。

IC : 募集してた。

ID : 全国的<sup>ぜんこくてぎ</sup>にね。

IC : いや、「Cotia 《コチア》 青年」も募集してってるしね。

(24) NA : \*、そうよね、やっぱり。こっちの、【食生活が】西洋式<sup>な</sup>なってるのよね。

NB : うん。そうよね。

NA : 油っこいもんとかね、からい【「塩辛い」の意味か】のね。

NB : うん、あと、Nāo 《いや》、その、油っこい、からいものはね、まあ、あの一、ちょっと、あー、支那ではよく食<sup>く</sup>べてるのよ。それ、昔から食<sup>く</sup>べてる\*ね。(NA : うーん) それで、肥えないんだ

## 分析例

からね。

4.2 節で見た存在動詞の場合には全体的に西日本方言形オルの使用が多かったが、アスペクト形式の場合には東日本方言形テルの使用が多いということになる。

同じ 1 世の話者でも IA と IC・ID では使用形式に差があるが、IC は 15 年間の日本での出稼ぎ経験があり、その間に標準的な日本語変種に接した可能性がある<sup>12</sup>。

(25) IC : わー、日本におったら、<sup>いぎ</sup>息詰まっちゃうな。俺も日本で 15 年も、(ID : うん) あの、アルバイトして働いたけど、また、以下は筆者の聞き取りによるが、ID はブラジル渡航後、技師(設計関係)として仕事をしているが、ブラジル人とのつきあいが多く、日系人とのつきあいは相対的に少ない。それに対し、IA は長期間の出稼ぎ経験がなく、ブラジルでは長らく農業を営んできた。つまり、IA はコロニアと呼ばれる農村型のブラジル日系社会のなかで西日本出身者と交わる機会が相対的に多く、そのために西日本方言のトルを多用するものと思われる。

また、同じ 2 世でも NB はトルの使用が比較的多く、この節の冒頭で述べたように、7 人の話者のなかで唯一、3 例だけではあるが、ヨルを使用している。

(26) NB : まあ、日本学校はねー、まあ、東京の使うことばっていうのを教えよったからね。

(27) NB : まあ、父たちが、いや、「勉強\*\*、\*\*、読めな一。<sup>はなし</sup>話せ

え」なんて言<sup>ゆ</sup>って、やりよったからね。

ヨルの用例は 3 例とも上例のとおり過去形のヨッタという形で、過去の体験を回想する際に使われたものであった。NB はサンパウロ州内の Itapeperica da Serra という街で生育しているが、この街には西日本出身者が特に多かったようで、NB 自身が自然談話中で次のように語っている<sup>13</sup>。

(28) NB : こちらの Itapeperica 《地名：イタペセリカ》のほうでは、高知県が多かったんだよね。(NA : あー、あっちのねー。はいはい) んー、高知県と熊本県と (NA : んー) まあ、福島県はうちだけだったんだよね。

このような社会的背景が、NB が比較的多くのトルを用いたり、他の話者が使用していないヨルを使用したりすることの要因のひとつなのではないかと考えら

<sup>12</sup> IC の出稼ぎ先が日本のどの地方であったかについては、調査時には時間の都合で聞くことができなかった。その後も県人会を再訪する機会があったが、都合があわず、聞き取りは叶わないままである。

<sup>13</sup> 逆に、NC・ND の生育した Mogi das Cruzes は相対的に福島県出身者が多かったようである(コクエーラ中央日本人会 1973 参照)。

れる。

#### 4.4 分析のまとめ

ここまで、形式ごとに使用の傾向を分析したが、それぞれの形式の使い分けに関わる言語内的な条件は以下のようにまとめられる。

(a) 否定形式

一段動詞では基本的にナイのみが用いられる。五段動詞の場合には特に制約なく、ナイとソンの両形式が使用される。

(b) 存在動詞

丁寧体の場合、および否定の形をとる場合には基本的にイルが用いられる。非丁寧体かつ肯定の場合にはオルが使用されやすい。

(c) アスペクト形式

丁寧体の場合、および否定の形をとる場合には基本的にテルのみが用いられる。非丁寧体かつ肯定の場合には特に制約なく、テルとトルの両形式が使用される。

また、言語外的な条件として、否定形式では五段動詞の場合、存在動詞とアスペクト形式では非丁寧体かつ肯定の場合を対象に話者別の使用状況をまとめたが、それについてもここで整理をし直す。表 14 は、ナイ/ソ、イル/オル、テル/トルのどちらの形式がより数多く使われたかを、話者ごとにまとめたものである。その形式が  $p < 0.05$  の水準で有意に数多く使われた場合<sup>14</sup>はカッコに入れずに、統計的に有意ではないものの 1 例でも多く使われた場合にはカッコに入れて、より数多く使われたほうの形式を示した。両形式が同数使われている場合には「-」で示している。また、西日本方言形はゴシック体の太字で示した。

表 14 話者ごとの各形式の使用状況

	存在動詞 (非丁寧体・肯定)	否定形式 (五段動詞)	アスペクト形式 (非丁寧体・肯定)
IA	<b>オル</b>	<b>ソ</b>	<b>トル</b>
IC	( <b>オル</b> )	-	テル
ID	-	( <b>ナイ</b> )	テル
NA	( <b>オル</b> )	( <b>ソ</b> )	テル
NB	<b>オル</b>	ナイ	( <b>テル</b> )
NC	( <b>オル</b> )	( <b>ナイ</b> )	テル
ND	イル	( <b>ナイ</b> )	テル

<sup>14</sup> つまり、仮に両形式が同じ割合で使われると仮定した場合、偶然そのような使用の偏りが生じる確率が 5%未満の低い確率であるという場合。

## 分析例

4.3 節で述べたとおり、同じ 1 世でも、コロニアと呼ばれる農村型の日系社会で長く暮らした IA は西日本方言形を多く使っているが、日本への出稼ぎ経験の長い IC やブラジル人とのつきあいの多い ID は東日本方言形が相対的に多く使われている。また、4.1 節で述べたとおり、日本語学校で標準的な日本語に接する機会の多かったと思われる 2 世も東日本方言形 (=標準語形) の使用が多い傾向にある。特に、NC・ND は、表 7 で示したとおり両親ともに福島県出身であり、日系企業での勤務経験も長いことから、東日本方言形 (=標準語形) の使用が多いものと思われる。

## 5. 他の方言接触事例との比較：ボリビア沖縄系社会

ここまでブラジルの福島県出身者を例に分析をおこなったが、本節では、南米移民社会における他の方言接触の事例として、筆者を中心に記述をおこなったボリビア沖縄系社会の日本語の事例 (白岩ほか 2010) を取り上げ、対照することにする。

表 15 として示すのは、南米ボリビアの沖縄県出身者によるコミュニティ「オキナワ村」で収集した自然談話資料をもとに、談話中で使われている否定形式の使用数をまとめたものである。

表 15 ボリビア・オキナワ村調査におけるナイ・ンの使用数  
(白岩ほか 2010 より。カッコ内は異なり語数)

	五段動詞	非五段動詞	計
ナイ	43	53	96
ン	29	0	29

白岩ほか (2010) では異なり語数もカウントしているが、ここでは省く

この表からわかるとおり、ボリビアの沖縄県出身者は否定形式ンを五段動詞のみに使用し、非五段動詞では使用していない。これは本稿 4.1 節で示したブラジルの福島県出身者と同様の傾向である。

このほか、西日本出身者が一定数以上移住した日本の旧植民地である旧南洋群島 (渋谷 1997)、台湾 (簡 2003)、韓国 (黄 2008) の日本語に関する記述でも、ンの使用が五段動詞にかぎられる傾向が見られる。本稿 4.1 節では、動詞末尾のルが撥音化する現象と関連させて、一段動詞でンが使用されない理由を説明したが、より一般的な傾向として、一段動詞でンが使われにくい理由が存在するのかもしれない。例えば、形態素分析をした場合、五段動詞の語幹に後接するンは-aN (例: kak-aN「書かん」)、一段動詞の語幹に後接するンは-N (例: mi-N「見ん」) と分析されるが、語形が特殊拍ひとつだけという不安定さのために一段動詞でンが使用されにくいのかもかもしれない<sup>15</sup>。

<sup>15</sup> 関西若年層方言においてンの使用頻度が一段動詞で極端に低いこと (ヘン・ナイの頻

また、存在動詞についていえば、白岩ほか（2010）で記述したボリビア沖繩系社会の事例では、存在動詞の使用例は全 25 例のすべてがイルであった。アスペクト形式もテルが 86 例なのに対し、トルが 5 例であり、圧倒的に標準語形のイル・テルの使用が多い<sup>16</sup>。表 15 に示したンの使用割合もブラジルの福島県出身者（4.1 節の表 8）と比べて相対的に低く、全体的に見て、ボリビア沖繩系社会の日本語は、ブラジルの福島県出身者の日本語よりも標準語的な性格が強いようである。

これは、白岩ほか（2010）で対象としたオキナワ村の場合、移民社会の構成員がほとんど沖縄県出身者で占められているためと考えられる。南米の日系社会で沖縄県出身者が本土出身者と別のコミュニティを作っていることは知られているが、このオキナワ村も、沖縄出身者とその子や孫によるコミュニティである。そのため、本土出身者どうしのコミュニティとくらべて、本土出身者（主に西日本出身者）の様々な方言と接する機会は相対的に少ない。また、沖縄のことば（ウチナーグチ）は本土の日本語と言語的に大きな隔たりがあるため、沖縄のことばの特徴が「日本語」にはあまり取り込まれなかったのではないかと考えられる。沖縄出身者の場合、「沖縄のことば＝ウチナーグチ」と標準的な「日本語」を別のコードとして意識する傾向があり、「日本語」で話す場合、その「日本語」に方言的な特徴を持ちこむことが少ないように思われる。

以上、簡単ではあるが、ボリビア沖繩系社会との対照をおこない、

- (a) 否定形式ンの使用が五段動詞にかぎられる傾向がより一般的である可能性
- (b) 西日本出身者との接触が多く、言語的にも西日本方言と隔たりの少ない福島出身者に比べ、沖縄出身者はより標準的な日本語を話していること

の 2 点を指摘した。

## 6. まとめ

本稿では、福島県出身の 1 世およびその子である 2 世を対象に、ブラジル日系社会において東日本出身者がどのように西日本方言を受け入れているか、方言接触の様相の一端を記述した。分析結果の概要は 4.4 節でまとめたとおりなので再び示すことはしないが、一見でたために方言が混じっているようでありつつ、実際には各方言形の使い分けに一定の基準（言語内的条件・言語外的条件）があることを示した。

本稿であつかったのはブラジル日系人の話す日本語のほんの一例にすぎず、

---

度が高い：高木 1999 参照）、西日本諸方言で一段動詞の否定形が五段化していること（例：見ン>見ラン、出ン>出ラン）なども、あるいは共通した理由によるものかもしれない。

<sup>16</sup> このほか、ヨッタの形でヨルが 9 例見られているが、ボリビア沖繩系社会のヨッタはアスペクト形式というよりも目撃性の表示として使われている（白岩ほか 2010）

## 分析例

出身や世代・年齢、職業、訪日経験の有無などによって、方言接触の様相は多種多様であることが予想される。5節で示したように、コミュニティの違いなどもふまえつつ、さらに分析を深める余地があるだろう。まだまだなすべき課題は多いが、ひとまず本稿では、現時点で収集・整備できた資料をもとに議論をおこなった。

## 参考文献

- 石川友紀（1989）「ブラジルにおける日本移民の地域的分布と職業構成の変遷——第二次世界大戦前を中心に——」『琉球大学法文学部紀要 史学・地理学篇』32
- 井脇千枝（2005）『ブラジル日系移民社会における方言接触』大阪大学大学院文学研究科修士学位論文
- 簡月真（2003）「台湾に残存する日本語の動詞の文法カテゴリー」簡月真・渋谷勝己編『環太平洋地域に残存する日本語の諸相（2）—台湾—』大阪学院大学情報学部（科学研究費補助金「特定領域研究『環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究』』成果報告書
- 工藤真由美・森幸一・山東功・李吉鎔・中東靖恵（2009）『ブラジル日系・沖縄系移民社会における言語接触』ひつじ書房
- コクエーラ中央日本人会（1973）『開拓のひびき栄えて コクエーラ植民地五十年の歩み』コクエーラ中央日本人会
- 国際協力事業団（1994）『海外移住統計』国際協力事業団
- 国立国語研究所（1967）『日本言語地図 第2巻』大蔵省印刷局
- 国立国語研究所（1991）『方言文法全国地図 第2集』大蔵省印刷局
- 国立国語研究所（1999）『方言文法全国地図 第4集』大蔵省印刷局
- 渋谷勝己（1997）「旧南洋群島に残存する日本語の動詞の文法カテゴリー」『阪大日本語研究』9
- 白岩広行・森田耕平・王子田笑子・工藤真由美（2010）「ボリビアのオキナワ移住地における言語接触」『阪大日本語研究』22
- 鈴木英夫（1982）「ブラジルにおける日本語の変容」『名古屋大学教養部紀要 A（人文科学・社会科学）』26
- 高木千恵（1999）「若年層の関西方言における否定辞ン・ヘンについて—談話から見た使用実態—」『現代日本語研究』6、大阪大学文学部日本語学講座
- 長尾勇（1977）「ブラジル日系人の日本語——母国語の忘却と日本語の教育」『言語生活』308
- 永田高志（1991a）「ブラジル日系人の言語生活——アサイ日系社会を例に——」『移住研究』28
- 永田高志（1991b）「ブラジル日系人の日本語の特徴——戦前移住地アサイを例に」『近畿大学文芸学部論集 文学・芸術・文化』2・3

- 中東靖恵（2006）「ブラジル日系社会における言語の実態 ——ブラジル日系人の日本語を中心に」『国文学 解釈と鑑賞』71-1
- 野元菊雄（1969a）「ブラジル便り」『言語生活』214
- 野元菊雄（1969b）「ブラジルの日本語」『言語生活』219
- 黄永熙（2008）「韓国高年層日本語の否定表現からみる第二言語の保持」『阪大日本語研究』

## 話題表の例

談話収録にあたっては、会話が進みやすいよう、以下のような「話題表」を状況に応じて作成した。基本的には即席で作ったものだが、話題の項目として挙げた内容はおおよそどの談話でも同じものである。

◎ 子どものころの思い出

(遊び、家の手伝い、学校、食べ物...)

◎ 移住したときのこと (1世)

- ・なぜブラジルに来たか。
- ・いつ、誰とブラジルに来たか。
- ・最初に住んだ場所は？
- ・何の仕事をしたか？

◎ ことばのこと

・ブラジルでは、どのようにことばを使い分けているか。

・ことばで苦労した経験は？

## Q ブラジルでの暮らしについて

- ・ブラジルのよいところ、悪いところは？
- ・ブラジルから見て、今の日本はどうか？
- ・毎日、どんなテレビ、本を見るか

## Q 地震のこと

- ・地震のニュースをいつ、どこで知ったか。
- ・福島の人や親戚と、どうやって  
連絡をとったか。
- ・ここからの福島はどうかと思うか。

## Q 家族、友人のこと

- ・家族は、どこでどんな仕事をしているか。
- ・友人についての思い出話やうわさ話

... などなど。

## 補足説明さくいん

移住者上陸の地サントス	1
ブラジルへの航路	3
コチア移民	10
構成家族	13
サンパウロの中心駅 Luz	20
ブラジル福島県人会	22
転住する移住者	33
ブラジル語	41
NHK の海外放送	43
リベルダージ地区 (ガルボンブエノ)	49
第二次大戦とブラジルの日本語	51
この会話部分の地名	54
東日本大震災とブラジル日系社会	66
モジ・ダス・クルーゼス	67
日系社会と野球	77
ピラール・ド・スール	91
IE・IF 夫妻と白岩	93
ハワイ移民	97
永住目的の戦後移民	98
日系人の出稼ぎ	100
ブラジルへの飛行機	100
日本に住む家族	101
「勝ち組」と「負け組」	105
写真結婚	114
露店市商人 (feirante)	120
敬老会と義援金のお礼	128
ピラール・ド・スール郊外	134

日系人の学校	145
「卓球を投げる」という表現	147
西日本方言の語彙	152
アチバイアの「花祭り」	155
アチバイア福島県人会	164
福島県人会の盆踊り	165

地図（福島県・ブラジル主要地名）



【地図1 各話者の福島県内の出身地（2世の場合は親の出身地）】



- ① ブラジリア
- ② リオデジャネイロ
- ③ ベレン

- A ミナスジェライス州
- B サンパウロ州
- C パラナ州

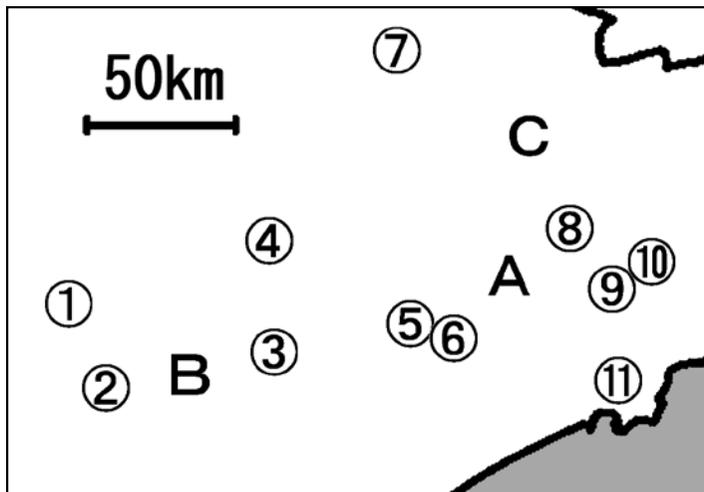
（日系人はサンパウロ州を中心とした地域に多く住んでいる）

【地図2 ブラジル全国地図】



- |          |                 |            |
|----------|-----------------|------------|
| A サンパウロ  | B ピラール・ド・スール    | C アチバイア    |
| ① イツベラバ  | ② アラサトウーバ       | ③ オズバルドクルス |
| ④ ルテシア   | ⑤ パラグアス・パウリスタ   |            |
| ⑥ カルロポリス | ⑦ サンジョゼ・ドス・カンポス |            |

【地図3 サンパウロ州地図】



- |               |                 |                |
|---------------|-----------------|----------------|
| A サンパウロ       | B ピラール・ド・スール    | C アチバイア        |
| ① イタペチニンガ     | ② サンミゲール・アルカンジョ | ③ ピエダージ        |
| ④ ソロカバ        | ⑤ コチア           | ⑥ イタペセリカ・ダ・セーハ |
| ⑦ カンピーナス      | ⑧ グアルーリョス       | ⑨ スザノ          |
| ⑩ モジ・ダス・クルーゼス | ⑪ サントス          |                |

【地図4 サンパウロ市周辺地図】

## 付記

本報告書におさめた談話の収録にあたっては、日本学術振興会の「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」として採択された大阪大学大学院文学研究科の「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」（通称：OVC プログラム）、および、平成 22～24 年度科学研究費補助金（基盤（C））「日系人日本語変種の成立過程に関する言語生態論的研究」（研究代表者：渋谷勝己）の資金を利用して調査をおこなった。

また、本報告書は平成 25 年度「上越教育大学研究プロジェクト（若手研究）」（研究代表者：白岩広行）の資金を利用して印刷したものである。

白岩広行編『ブラジル日系社会談話資料 ——福島県出身者たちの語り——』

---

2014 年 2 月 27 日発行

---

〒943-8512 新潟県上越市山屋敷町 1

上越教育大学大学院学校教育研究科

言語系コース 白岩広行研究室

電話 024-521-3327 メール shiraiwa@juen.ac.jp

---

- ※ 音声データが欲しい方はご連絡ください（大学の授業や会議で不在のことが多いので、電話よりメールのほうが確実です）
- ※ 本報告書に掲載した写真はすべて白黒ですが、白岩の個人サイト「web 白岩」（<http://shiraiwa.sakura.ne.jp/>）のなかにカラー写真を掲載する予定です。もしよければご覧ください。